東京立正女子短期大学紀要

第 6 巻

目　次

英語教育における Punctuation の用法について (1)……井口美登利（1）
英語教育における視覚教材のあり方……田島富美江（16）
動詞副詞結合の名詞への転化……蔭山友行（29）
The Pearl の文体と善悪について……深沢俊雄（46）
ウイリアム・フォークナーの *That Evening Sun* について……佐藤秀一（56）
隠れキリシタンの「天地始之事」……紙谷威広（86）

1978

東京立正女子短期大学

英語教育における Punctuation の用法について -1-

井　口　美登利

0　はじめに：

0－1　これはどの語学についてもそうであるが，例えば，英語の能力を評価する場合には，(1) Reading (2) Writing (3) Speaking と分類するのが通例である．このうち，前二者において決定的な役割を演じているもののひとつに Punctuation の用法があることは，誰しも，異論がないであろう．

0－2　しかもなお，すくなくともわが国の英語教育の場において，Punctuation の用法ほど等閑視されているものは無いのではなかろうか？ その原因の相当量は，あえて失礼な言い方をするならば，英語教師の大半が真の意味における Writing，すなわち，もっとも日常的な Letter にせよ，あるいは，Report や Thesis の類も含んで，およそ，まとまったものを英文で書くという能力あるいは訓練に欠けているところにあると推定される．Letter の Salutation に Semicolon を添えて平気でいるならば，単なる「場ちがい」に終らず，それこそこれは，感嘆文の終りに Question Mark を附けるのと同じ位の大きな「間ちがい」になることさえ余りご存じない方々が尠くないのは遺憾ながら事実である．Abbreviation を示す Period ひとつを取ってみても Miss. は決して Miss にはならず，Mississippi の略字として読まれるに相違ないし，p.p. を Pages とは読ませるべくもない．

まして，Restrictive と Non-restrictive な Condition を意図的に区別して表現するためといった類の Punctuation の活用と駆使に至っては，一般的に，わが国英語教師のもっとも不得意とするようである．ところが，いざ Reading となると，Original Writer による Essay や Article には，きわめて当然のことながら，一定の Rule に従って，まことに手際よく Punctuate されている Sentence に毎日お目に掛っているはずなのである．

さて英語を母国語とする国々における「英語教育」にあっては，実のところ，Punctuation の用法はまさに正当な待遇を受けていることを知るのである．すくなくとも，大学およびその予備教育において，多くの時間を当て，独立教課のひとつとして充分に指導されていることは，仮に大学入学試験における「英語」の問題を一覧してみるだけでも充分に理解されよう．そしてまた，辞書とならんで学生および実務家が必ず備えるという Handbook，Reference Manual のすべてに，必ずや「Punctuation の用法」について1章を設け詳細な解説と実例を載せていることは，けだし当然であろう．

「学校を出ても，手紙ひとつ書けぬ…」という批評あるいは不満は，決して戦後におけるわが国の専用語ではない．高等教育を受けた者にとって要求される Writing の能力のうち，すくなくとも，その基本的な条件のひとつとして Punctuation の知識が必要なことは，英語国において（ドイツ語・フランス語等についても同様であろうが）周知の事実となっており，彼等はそのための努力を惜しまないのである．

0－3　一方，日本語の表現については伝統的に Punctuation Marks の使用を軽視するという歴史的背景のあったことを看過してはならない．最初，わが国がその言語表記のために借用した漢文＝古代中国語の文献には，経・史・詩・集を通じ，公・私の記録・文書に至るまで，およそ，句読点を加えることをしなかった．それは，文字を読み・書くことがひとつの特権であり，誇り高く教養ある読書人にとっては，Punctuation なぞは一切不要であり，あるいは，不要でなければならぬ，と考えられていたからに他ならない．この伝統がその文字と共にわが国の支配階級にも受容されたのは至極当然のことであったろう．もっとも，日本人の優れた才能はやがて独特の音節文字「片仮名」「平仮名」を産み，象形・表意文字と表音文字とを組み合わせた「漢字仮名交り文」というまことに特色ある文字表記様式を定着させたのである．[1]

1.　メソポミタアにおける楔形文字の発達史において，実に数千年を必要としたこの進化の道程を，僅か数百年にしてわが物としたわれわれの祖先の非凡な着想は，先進国の文字を借用することによって出発するという条件に恵まれたとしても，正当に評価すべきであろう．

「男もすなるという日記というものを女もしてみんとてするなり」と紀貫之に書かしめたのは，士大夫たる男性が女子供の用いる仮名文字を以て和文を記することが，タテマエ上許されなかったという当時の日本的な文化風土を物語る逸話として余りにも有名である．外国語たる漢文を自在に読み書き出来る知識人階級にあっては句読点は自他ともに無用であったわけである．はるかに降って世は江戸時代に及んでも，なお，こうした風潮は根強く引き継がれていた．井原西鶴がその作品に「句読点」を施すことを主張として，版元と論争したいきさつも，その皮肉な結果とともに，周く知られたことである．まさに，女子供をも，対象とした稗史小説の分野にあってさえも，これまで Punctuation はお呼びでなかったことになる．当然，今日でいう法律・政令に相当する公文書はもとより，武家・商家を通じての私的な書簡・消息に至るまで，和洋漢文，候文，さらには和文と各種の文体に亙る，文書一切に対して「句読点」は無用とされてきた．その理由は，「こうした補助手段を必要としなければ読むことが出来ないような者には強いて読ませることはない」と云うことにあるが，勿論これはあくまでも表向きのことであり，例えば，寺小屋等における初等教育の場においてはもとより，れっきとした武士の通った藩校においてさえも，私かに「フリカナ」と共に「句読点」を教科書に書き込むやからの多かったことも想像に難くない．さらにまた，驚いたことには，仮名に伴う濁点・半濁点さえも省略されるのが通例であったから，文書の読解には Handwriting の Decipher に加えて一層の「勘」と「判断力」が要求されたのである．「読み」「書き」「そろばん」と履修科目は少かったとは言え，それぞれの Requirement は，今日の常識からすれば，相当に高度のものであったと言うことが出来よう．

明治維新後も，滔々たる西洋文明の輸入の中にあってさえも，こうした慣習は依然として維持された．上は詔勅を初め，官員の手になる一切の公文書は，ようやく和洋漢文体を離れて「漢字仮名交り表記」による和文表記を通例とするようになったのであるが，「句読点」は未だ全く加えられることがなかった．例えば五箇条の御誓文・大日本帝国憲法・教育勅語等の原文を参照して見ればよい．中には，ことさらに万葉仮名を用いた擬古文体の軍人勅諭などの類があって，これらは今日の学生にとっては殆ど読解の困難であろうこと，ただに句読点を欠いているのみだけではないので

ある．こうした歴史的背景が，日本語表記における Punctuation の Rule をその文法構成の上に確立させることがなかった結果となり，こうした母国語におけるいわば不統一で，気ままな使用の許される句読点の印象が，外国語学習の際にもまた，それなりの影響を学習者に及ぼしたであろうことは想像に難くないところである．

0－4　僅かに，3種類の外来 End Punctuation：すなわち—Period, Question Mark, Exclamation Point の用法だけがほぼ正確に受容され，外国語のみならず，横書き（時には縦書きにも）日本語の表記に汎用され，定着したというのが現状のように思われる．しかしながら，もっとも使用度数の高い Comma を初め，Colon, Semicolon, Dash, Apostrophe, Hyphen さらには Quotation Marks, Parentheses 等に至っては，（広義の Punctuation Points としては，この他に Spacing, Capitalization 等をも加えることができようが）Reading においてその多くの用例に接しているべきはずであるにも係らず，その用法を適切に理解した上で，これを Writing にあたっても，文章表現上の有用な Tool として縦横に駆使するだけの知識と能力を身につけた学生に接することは，あながち筆者の狭い経験のみではないと考えるのであるが，遺憾ながら極めて稀少な事例に属するというのが現実ではあるまいか？

0－5　単なる教養あるいは情報獲得のための補助的手段として，英語教育から，直接に Reading, Writing, Speaking の可能な国際人の育成を志向する英語教育への転回が当面の急務として真剣に検討されている今日，わが国の英語教育においても，いまこそ「Punctuation の用法」についての指導内容を系統的に整理し，独立の教課として英語学習の早期にその基本的な知識を与えるとともに，すくなくとも，Reading および Writing 教育の各段階において，実際の用例をもとに充実した教育と演習を実施することは，是非とも，肝要であると確信する次第である．本稿がそのための問題提起のひとつとなれば，洵に幸いであると思う．

1　Punctuation の歴史

1－1　いま，仮に "Punctuation" を定義するならば，さしずめ「文書の

読解を容易にし，その正確な理解のための有効な補助となるような，語隔・記号・書体等の組織的な用法」ということになるであろう．

また，これを語源的に探ねるならば，Point を意味する Latin 語 "Punctus" に発することは明らかである．そして実際に，15世紀から18世紀の初めにかけては，上述の定義に示した内容については "Pointing" という語が当てられていたのである．元来，Hebrew 語における母音表示の意味に用いられた語 "Punctuation" が，"Pointing" に代って，今日のように使用されたのは18世紀中葉のことであったとされている．

1—2　16世紀後半，英語における Punctuation に関する理論研究と文書表記への応用はきわめて活発となったのであるが，そこには基本的に対立するふたつの考え方があった．

そのひとつは，中世紀以来の伝統を承けた「発声法」あるいは「雄弁術」の立場に據るものであって，聴衆を前にしての発表あるいは演説を行なうにあたり，話者の便宜を計り，演出効果を考えた上での発声の補助記号，とりわけ，長短いろいろの「間」を取るための記号を台本に書き加えることを主要な目的としたものである．[2]

もうひとつは，「統語法」の立場を重視して，Punctuatioh を単なる発声上の補助記号に止めず，文章構成のための大きな役割を与えようと主張したものである．17世紀の終りに近く，この考え方が主流を占めるようになり，それまで，いわば恣意的に用いられてきた Punctuation に理論的な統一が検討され，やがて今日一般的に承認されている用法へと定着するのである．

こうした統語法あるいは文法上の Punctuation は，何よりも，それが

2. 現代の Typewritten された Speech Manuscript にも，その用途に適合するような独特な Style が採られていることは，その名残りと考えてもよかろう．すなわち，通常の Single あるいは Double Spacing に代えて Triple Spacing を用い，One Sentence を One Paragraph として扱い，10-stroke の深い Indention を伴なうのである．もとより，その内容を Visual Media を通じて発表するための，例えば News Release Paper 等においては，こうした Style は全く無縁のこととなってくる．Radio，TV のための，いわゆる放送原稿では，これに加えて固有名詞の正確な発音のための特殊な表記が用いられていることも，その目的に照らして当然であろう．

有効でなければならない．文章構成を明瞭にすべきものであって，いたずらに複雑化するものであってはならぬことは当然であろう．そしてまた，いわゆる Good Punctuation には文体と密接に関係して多くの個性的な類型の存在が可能である．人は言う：Henry James の文章は，そこに見える無数の Comma なくしては，理解しがたいが；Ernest Hemingway の文章は Full stop 以外の Punctuation を殆んど必要としない，と．G. B. Show は稀にしか Inner Punctuation を用いぬが，T.S. Eliot の Essay においては，優にその 10 倍を超える Inner Punctuation を必要とする．

これは，わが国の作家についても同様であろう．紫式部の延々と続く長大な文脈には句読点はむしろ無用であるが，清少納言の，直截簡潔な体言止めの文体には，すくなくとも語隔による休止は大いに有用であろう．和文の伝統を承けた樋口一葉の文体と漢文脈を生かした森鷗外のそれとでは，句読の分量には大差があって当然である．極端な事例として，宇野浩二の文芸は，あの無数の句点なくしては到底成立しないであろう．

いずれにせよ，如何に衒学的な知識人にあっても，Punctuation 無用論を唱える者のもはや有り得ないことは，洋の東西を問わず，今日の大勢であろう．

1—3　今日，英語を初めとする西ヨーロッパ諸国の言語表記の上に用いられている Punctuation の祖型は，当然のように，これを古典時代のギリシャおよびローマの文献に求めることができよう．

本来，ギリシャ語の表記には，語隔を明けることなく，連続してこれを書くのが通常であったが，時として，Phrase の間に 2 箇あるいは 3 箇の点を縦に連ねて打ち，前後の関係を明らかにした文書も，B.C. 5 世紀ごろから散見されている．さらにまた，およそ B.C. 4 世紀と比定されるギリシャ語パピルス文書には，その記事が新しい題目に入る行の下側に横線を引いて，これを表示する方法を採っている事例があり，この横線を Paragraphos と呼んでいたことが知られている．かの Aristoteles (384～322 B.C.) の時代における Punctuation は以上の 2 種類に限られていたのである．

ギリシャ語における Punctuation System を大きく前進させた功績は，B.C. 195年，Alexandria 大図書館の館長となった文献学者，Byzantium

の Aristophanes[3] に帰せられる．彼は文あるいは節を，その長短に応じて，3種類の記号によって分ち，その関係を明らかにしようと試みたのであるが，ここに初めてその記号の名称として（Comma）（Colon）および（Periodos）が登場することとなる．

もっとも，これらの記号は現在のものとは全く別のものであった．すなわち，ひとつの点を，その打つ位置によってそれぞれ異った役割を持たせようとしているのである．短かい区分を表わす Comma は，最終字の後，字隔の中央に点を打つ．これはちょうど現代日本語表記における句読点「中黒」と同じ位置にあたる．より長い区分のために用いる Colon は，この点を字隔の下方にうつ．これは現代の Full stop と同じ位置である．さらに長い区分を示す Periodos は字隔の上方に点を打つわけである．

当時のギリシャ文字が縦長な書体を持っていたことから，こうした位置の相違による用途の判別には，それほどの困難を伴わなかったものと思われる．もっとも，Aristophanes の優れた着想も，古代における多くの非凡な発明と同じように，普く世に知られ広く実用に供されることのないまま，空しく埋れてしまったようであるが，その復活は，これをローマ時代に見ることができる．

降って8・9世紀の交に，Question Mark が新しくギリシャ語の表記に加えられたが，その記号もまた，現代のものとは大きく違い，今日の Semicolon と同じ（；）が用いられたことは，まことに興味深い．

今日復刻されているギリシャ語文献に施されている Punctuation は，さらに後世のものに属し，主として，ルネッサンス期以後，イタリアおよびフランスの印刷業者の手により協定されたものを基本とする．そこでは Aristophanes[3] のいう Colon は除かれ，現代風の書き方による Comma と Period の両者に字隔の上方に点を打つという書き方の Semicolon を加えて，合計3種類が用いられた．これに Quotation Marks と Exclamation Mark が加えられるようになるのは，さらに後年のことである．

1－4　およそ B.C. 1世紀の終りごろと比定せれる最古の Latin 文書か

3. もとより，この人物は高名の喜劇詩人 Aristophanes（445～385 B.C.）とは別人であるが，その喜劇作品の多くを校訂しているという因縁が両者を結んでいる．

ら始めて，殆んどのローマ時代の文献には，語と語とを分っための点が施されている．そして，段落を示すためには，新しい文の冒頭の語を2～3字分左の余白に突き出させるという，今日の Style では Inverted Paragraph に当る方法を採っている．なお，現在では Paragraphing を表わすための一般的な方法である Indention—新しい文の冒頭の語を2～5字分引込ませる書き方—の起源は17世紀に属するから，はるかに後世のことに属する．

ローマの学者たちは，例えば4世紀の文法学者 Donatus にしても，総じて先に述べた Aristophanes の Punctuation System を推奨しているが，こうした専門的な学究を別とすれば，この System がどれだけ実際に復活・使用されたかは疑問であろう．また，この頃になると，語間を分つ打点はおおよそ省略され，文末の字隔と文頭の字の拡大とが一般化されていた．後者は言うまでもなく，今日の Capitalization の祖型に外ならない．

もちろん，例外もあった．St. James（～419/420）の翻訳によるという Vulgate 聖書には，朗読に適するよう，Phrase ごとに厳密な句読が施されていたことは周知の事実である．

1—5　いわゆる Majuscule な書体から Minuscule な書体への移行が見られたのは7・8世紀のことであるが，例えば単音節の前置詞にしても，それが次の語から分離して書かれるようになるまでには，さらに数世紀を要したのであって，一般には連続して書かれた Sentence あるいは Paragraph の後に余白を明け，次の Sentence あるいは Paragraph の初めを拡大した文字，多くは旧書体たる Majuscule で，書くという習慣がようやく定着していったに過ぎない．これと併用する Punctuation の用法については，ローマ時代の Punctuation に準據するような提唱がしばしばなされたにも拘らず例えば，文の終りを示すのには，二種或は三種の Mark が重複して使用されたといったように多分に複雑なものであった．

前に述べた St. James が Vulgate 聖書の朗読用に施した厳密な Punctuation の Rule は，かの神聖ローマ帝国の基礎を定めた英王 Charle Magne =Charles I (c.A.D. 742～814) の世に再び脚光を浴びる時機が到来した．すなわち，大王の待講となった York 生れの学者 Alcuin（735～804）は Aachen に王立の学校 Schola Palatina を開き，主として聖書および祈禱

文を対象としたものであるが，Spelling および Punctuation に関する改善に努めたのである．後者について，その底本となったのは外ならぬ St. James の Punctuation であった．

現在はそれぞれフランスとドイツに属する Corbie と Aachen で筆写された最古の Caroline Minuscule 書体の古文書が今に伝えられているが，その成立年代は，およそ780～800年と比定される．そこに見られる Punctuation は Alcuin の定めた新しい System である．この System は，この System によって書かれた文書の普及にともない，ヨーロッパの各地に伝えられて行ったが，12世紀に至って，ようやく，現行の Punctuation の祖型とも言える System として定着したのである．

新しく改良されたところは次のようである：文中の段落には，単一の Point あるいは Comma を用い，文末を示すのに複数の Mark を併記するという従来の方法は一応守られたが，後者はその表記を統一して，*punctus elevatus*(✓)と *punctus interrogativus* (?) の二種としたことである．この新しい二種の記号の起源は，すくなくとも9世紀初頭より存在していた Gregorian 聖歌のための音楽記号 *neums* にあったとされているが，このことから容易に想像できるように，*punctus elevatus* (✓) *punctus interrogativus* は，単に休止と構文上の段落を示すに止らず，音声の抑揚をも定めたのであった．

次いで12世紀以降，もうひとつの Mark として，*punctus circumflexus* (7) が加えられたが，これは主として，従属文あるいは従属節の終りを示し，その所の抑揚は語尾を上げるべき場合に用いられたのである．構文上は文章がいまだ完結しない場合を示すことになるわけでこれは今日の Colon の前身と考えることができよう．

たしかに，現存する中世末期の祈禱古写本には，以上の Punctuation Marks が厳密に施されているが，一定の音韻と抑揚によって祈禱を捧げることは宗教上，きわめて重要なことであったことを窺わせるとともに，Punctuation System の統一も，こうした背景から実現した経過を知るのである．

このほか，行末の語を分綴する記号である Hyphen は10世紀後半に登場し，初めは1本の短かい横線(—)であったが，14世紀以降は2本の横線(=)と形を変えて行った．再び(—)が一般的となったのは18世紀と19

世紀の交のことである.[4]

Ablaham Lincoln の有名な Gettysburg Address の草稿には，第一・第二から数えて数種の異本があるが，今日，流布されている Bliss Copy は Lincoln が演説を終った後，求めに応じて自らの草稿に手を加えたものであることの証左として，アメリカ国会図書館所蔵の Original Copy 2枚に見られる合計8箇の行末の Hyphen は，いずれも Double Hyphen の形で書かれている事実を挙げることができる．すなわち，この Hyphen の形から，Lincoln が印刷に附するために与えた原稿であることが明らかであり，たとえその日付が1863年11月19日とあったとしても，Lincoln が後日，改めて筆を執ったものであることを知るのである．

1－6　中世末期における Punctuation は12世紀のそれと比較するときに著しく緊密さを欠き，時には恣意的であるとさえ言えるのであるが，そのことは13世紀および14世紀に Paris, Bologna あるいは Oxford の大学で教科書用に筆写された書物を見れば明らかである．

例え Paragraphing を示す Mark である *capitulum* (c) は本来の用途を離れてほとんどの Sentence の初めに附けられているし，単一の Point (.) と *punctus elevatus* (✓) の代りに，*virgule* (/) をその何れの場合にも用いていることなどが目に立つ．原典である Latin 語文書における文体と句読の統一は，それを英・独・仏・伊語等に翻訳するに方り，大幅に失われている場合が多く，印刷術が普及した後の書物も，最初の書写本を底本とすることから，同様の結果を残している．僅かに，各国における聖書と祈禱書の初期の印刷本には，朗読における抑揚を示す句読が厳密に残されていることを例としているに過ぎない．もっとも，夥しい Point (.) と Virgule (/) を含むことで知られる英国の印刷業者 William Caxton にしても，その用途を専ら音韻と抑揚と考えていたようであり，こと構文上の Punctuation となると全く無関心であったと考えてよいのである．

---

4. 現代にあっても，印刷原稿あるいは校正記号として用いられる Hyphen は Single の(—)ではなくて，Double の(=)を使うことが一般的である．その理由は，見落しを防止するためであるに違いないが，自分の書いたものが印刷に附される機会の多い文筆関係者には時として，Handwriting はもとより Typewriting においてさえも，いわゆる Double Hyphen を用いることがある．

新しい Punctuation Mark として，括弧 Parentheses ( ) が加えられたのは16世紀に入るころであり，その記号と用法は，概ね現行のものと変りがない．

一方，こうした自由な Punctuation Marks の使用とは別に，一切の Punctuation を省略した文書の記述を標榜する方向も無くはなかった．早くも15世紀において，英国の法律関係文書の中には，全く句読点を排除した体裁で記録されるものが現われているが，一部の知識階級とりわけ法曹会にはその風習が広まって行くのである．[5]

今日でも，英語国であるイギリスとアメリカの法律家には極力 Punctuation Marks を手控えた文書を作成する例が多いが，その主旨とするところは，こうした文書の性格からして，構文から来る曖昧さを極力防止しようと努めることにあるという．これは確かに，名詞の性別や冠詞の格変化を思い切りよく単純化してしまった特色ある言語「英語」の持つ文法上の弱点を露呈したものと言えるであろう．

1—7　このように，いわば混乱した中世の後期の Punctuation と，近世・現代とを繋ぐものは，15世紀においてイタリアで筆写された古典および当代の Latin 語による書物，いわゆる Humanism 関係の文献における精密な Punctuation であったと見てよい．およそこの世紀の半ばに至ると，*punctus elevatus* (✓) は *virgule* (/) および現在の Colon (:) に置き換えられた．さらにまた，本来は (/) として書かれた *virgule* も次第に行の下方に沈み，やがてその下端が彎曲して，現代の Comma (,) と変化するのである．

こうした Humanism 時代の Punctuation System を集成し，さらに前進させたのは，Venetia の人 Aldo Manuzio=Aldus Manutis (1450～1515) であったが，Aldo は5冊本の Aristoteles 選集を印刷出版したのを初め，多くの Greek および Latin の古典を復刻したが，また italic 書体の活字

5. 前に述べたように，古代および中世を通じての中国の文献は，単に法律文書のみならず，すべて句読点なしで記録されてきたことは前述の通りである．わが国にも，その伝統は伝えられ，明治以降も，しばらくは一切の公用文書には句読点を加えることがなかった．けれども，その理由と背景については，西欧のそれとは大きく異っていることに注意しなければならない．

を創めて印刷の合理化を遂げたことでも著名である．Aldo Manuzio がその著 Ortho graphiae ratio の中でこの新しい Punctuation system を詳細に解説しており，そこに用いられている Punctuation Mark はその名称こそ異なるが現代の Comma (,) Semicolon (;) Colon (:) および Period (.) を含んでいるのである．さらに重要なことは，Punctuation の主要な目的とするところは文章構成を明らかにすることにあると明言している点にあり，こうした見解は少くとも今日知り得る限り小 Aldo を以て嚆矢とするのである．

1—8　およそ16世紀の終りに至るまで，英語の文書は1566年小Aldoの示した方式に従って Punctuation を行ってきたが，その目的とするところは，小Aldo の賢明なる提言にも拘らず，構文というよりも発声のために限られていたと言ってよかろう．従って，かの George Puttenham が1589年その論文 The Arts of Enghish Poesie において主張した如く，1単位の休止に Comma を，2単位の休止に Semicolon を，3単位の休止に Colon を用いようと試みたのは，当時の基本的混乱と言っても状況に対する不満を表明したものである．降って1640年，Simon Daines もまた，同様の趣旨をその著 Orthoepia Anglicana 中に述べられている．

事実，Elizabeth 朝における戯曲の Punctuation もまた，依然として発声法のためのものであったと云えるが，Punctuation をこうした目的に限定したとしても12世紀の Latin 語文献に比べてむしろ退化していると思われる．すなわち，そこには単に大小の休止を指示するだけで，抑揚に関する配慮を欠いているからである．

こうした発声法のための Punctuation から，これに文章構成のための手段として目的を与えようとしたのは，英国にあっては，詩人・戯曲家としても高名な Westminster の Ben Johnson (C. 1573～1637) の著作 English Grammar が最初であろう．この労作は1617年に脱稿したが，実際に出版されたのは著者の没後1640年のことであった．いずれにせよ小 Aldo に遅れること50余年，大 Aldo からはおよそ100余年の隔りがあることになる．

こうしたために学者あるいは文人としての主張とは別に，実際の文筆活動において，発声のためではなく構文のために Punctuation を用いた事例

としては，古くは1625年版の Francis Bacon (1561～1626) の Essay が挙げられる．そして1660年における Charles 2世の王政復古以後は，構文上の Punctuation という考え方が次第に主流となって行った．

さて18世紀に入るや，Punctuation Marks の使用は，一般に，いささか過剰気味となってきた．すべての従属節の後にはもとより，およそ分ち得るすべての Phrase を Comma で区切るような事例さえも少しとしない．こうした風潮の痕跡はさらに降って1880年に London で出版された英語表現法の Handbook にも認められるのであった．

こうした Punctuation Mark の氾濫を警めて，現代のように必要にして充分なる範囲に止めた適切な使用を提唱したのは，すでに今世紀に入り，1906年に出版された語学書 The King's English であるが，この書は高名なる語学者・辞典編纂者として知られた Henry Watson Fowler (1858～1933)[6] がその弟 Francis George Fowler と共同で著わしたものである．

しかしながら彼の代表作は，むしろ，1926年出版の Dictionary of Modern English Usage であろう．ここで Fowler は現在英国で規範となっている Punctuation の用法を確立しているのである．(この有用な辞典は E. Gowers の改訂に係る第2版が1965年に刊行されて，今日もなお大きな権威を持っている．)さらに，英語学全般に及ぶ Fowler の労作は Society for Pure English の機関誌に多数収められており，その中には，当然のように，Punctuation に関する論文も含まれている．

1－9　建国以来，同じく英語を公用語とするアメリカ合衆国における Punctuation の用法は，おおむね，英国の場合と同様の経過をたどったと考えてよい．もっとも，現在確立されている用法について見るならば，本家である英国のそれに比して一般的により厳重な，あるいは，融通のきかない Rule が定められていることは，むしろ意外の感があって，こうしたところに，American English のひとつの側面を窺うことができる．

---

6. H.W. Fowler はまた，活翰な Oxford Dictionary の簡約化という事業を委嘱され，1911年に刊行の運びとなったのが，かの The Concise Oxford Dictionary であり，小型英語辞典の傑作として，その後数次に亘る改訂を経て現在に至っていることは人の知るところである．

1—10　本章に述べてきた英語における Punctuation の歴史的変遷を要約すれば，次のようになるであろう：

(1)　今日の英語に用いられている Punctuation の用法は 17 世紀以後に確立されたものである．

(2)　その大要は，目的に応じた各種の Punctuation Marks を活用するとともに，あるいはこれに先行して，次の手段を取ってきた．

a)　Word の後に Space を明ける．

b)　Paragraph の First line を Indent する．

c)　文頭の Word および固有名詞を中心とする Word の First letter を Capital で書く．[7]

基本的な Punctuation Marks は：

Period　(.)
Colon　(:)
Semicolon (;) および
Comma　(,)

の 4 種であり，補助的なものとして：

Question　(?)
Exclamation　(!)
Quotation Marks (“ ”)
Hyphen　(-)
Apostrophe　(’)
Dash　(–)
Parentheses　(( ))

1—11　英語以外の主要なヨーロッパ語における Punctuation Marks については，それぞれの国において現在確立している用法が，その源流を等しく 15 世紀・16 世紀におけるイタリアおよびフランスの印刷出版業者に発していることは英語と同様であるから，基本的に共通していると考えてよかろう．若干の異同を列挙すれば次のようである：

7.　いわゆる Capitalization もまた，Punctuation の有力なる構成要素として，その中に包含して考えるのは今日の文法学者の定説となっている．

guillemets (≪　≫) フランス語において，dash とならんで，quotation marks の代りに用いる．

inverted interrogation mark (¿)
inverted exclamation mark (¡)
スペイン語では18世紀中葉以後，疑問文・感嘆文の始めにそれぞれ invert された mark を附け，文末の mark と対称にするような表記の方法が一般化してきた．

なお，スペイン語での Quotation はフランス語風の (≪ ≫) および英語風の (“ ”) を併用している．

German quotation Marks („ “)
reversed guillemets (≫ ≪)
ドイツ語の Quotation には，このいずれかを使用するが，近時，Typewriting においては英語風の (“ ”) にあたる (″ ″) を汎用する例も多くなっている．

(本稿は，はじめに述べたように，わが国の英語教育における弱点としての Punctuation の用法について，ひとつの問題提起を行なうことを目的としたものである．しかしながら，本論に入る順序としての歴史的な回顧をもって，今回与えられた紙数を終ることとなった．次回の続稿をあわせご覧頂きたいと，予め願い上げる次第である．)

〔1977年8月末日稿〕

英語教育における視覚教材のあり方

田　島　富美江

はじめに

視聴覚教育の専門家達はしばしば次のように述べている．“学習を効果的にするには，ことば偏重を排し，多くの感覚を通じて学習させるのが望ましい”，と．これは視聴覚教育が，わが国の授業に取り入れられる動因となったものであり，以来約30年を経た今日に至っても，安易に受け入れられている考え方である．しかし，この辺で，われわれは，授業に使用されている視聴覚教具，教材を一つ一つ取り上げ，その使用法や効果の程を充分に検討する時期に来ていることを痛感する．本稿においては，中学・高校の英語教育の中で使用されている「絵」の果す役割りについて考察し，今後の問題を探ってみたいと思う．

ここで扱う「絵」というのは Dale の視聴覚教材の分類のうち，still pictures に相当するものである．たゞし，言語の文化的背景を紹介する写真，ポスターの類を除き，語い・文型等の習得や，文法事項の理解のために必要な場面設定用のもの，即ち，純粋に英語の学習活動と言語活動の能率化を企る，教師の手描きの絵の構成要素に焦点を当てることとする．いわゆるスピーディな文型練習のキューとして使用する絵は含めず，又その提示の手段（画用紙，OHP，スライド）も問わない．

I “母国語学習と場面”の再確認

われわれが母国語を獲得していく方法は，言語研究家によって幾つかの説が挙げられているが，いずれも，環境と個人の素質という要因が複雑に絡み合って獲得されていくものだという考え方が基本的に認められる．即ち，母国語の発達は，先づ喃語に始まり，一音節の母音から子音へと経過し，やがて単語から文へと進んでいくのであるが，この間学習者は，その

第一段階として，与えられた言語環境（即ち，ことばと，そのことばの背景となる場面）からの刺激を，全身の感覚によって経験し，模倣することにより，次々と大脳のどこかに記憶し，蓄積していくようである．これは模倣の段階と呼ばれ，3才頃まで続くのであるが，その後は，創造の段階へと移行していく．即ち，知能の発達に伴って，学習者は以前の経験に類似した，新らしい言語環境から刺激を受けると，それまでに大脳に記録されて来た過去の経験の蓄積や，又，経験と共に僅かに形成された概念等を総動員して，自分の力で意味を理解しながらことばを獲得し，次第に有意味な発言を可能にしていくのである．そして6才頃には母国語の型が一応身につくといわれている．

この創造の段階からを真の母国語学習ということができ，われわれ外国語教育にたずさわる者が特に関心を持たねばならないところであろう．母国語学習は，人間が生活していくための道具的な行動と考えることができるから，その中の“主体的な要因”が特に重要な意味をもつものである．人間は環境から来る刺激の中から，主体的な欲求や場の要求にしたがって重要なものだけを選択的に記憶し，不必要なものは無視する傾向がある．それは，生活に必要なものを選択記憶するというだけでなく，可能な限り少ない労力で効果をあげようとするエネルギー節約の意味も含まれている．というのは，人間には経験したすべての事柄を記憶する能力には，おのづから限界があって，刺激をそのまゝの形で記憶せず，記憶しやすい形に操作して記憶する傾向がみられるが，後に，それを場の必要に応じて，過去に記憶されたことばの中から選択，再生，再構成しながら言語的な反応をしつつ言語を獲得，拡大していくのである．われわれの日常の言語活動も，常に上記の過程を経て行なわれていることを充分理解しなければ，外国語教育に大きな間違いが生じることもあり得ると思われる．

われわれが母国語を記憶していくのに，“場面”はことばの意味の理解をたやすくしているばかりか，前述の如く，類似した場面の中で類似したことばが何度も反復されることにより，鮮明な概念形成に到達する助けとなっている．これは，学習者が，ことばと同時に全身の感覚器官を通して場面からの刺激を知覚することにより，そのことばのより正確な意味を理解し，更に数々の同類の場面を経験することにより，それらの経験を一般化し，明瞭な概念形成へと発展させていくのである．そこには常に，学習

者の主体的な環境への働きかけがあり，その働きかけが，次第に思考力を発達させ，更に意味あることばの構成へと導いていくのである．以上のように場面は単にそれと同時に学習することばを意味づけるためばかりでなく，言語構成や記憶，その他の言語活動のあらゆる面と関係をもつために外国語教育でも関心を持たれている点なのである．

II　視聴覚教育理論の解釈の誤り

以上，母国語学習は環境，即ち場面への全身的な働きかけであることを改めて確認したわけであるが，全身的な，ということは，全感覚或は多くの感覚を通じて，という意味であり，ここに英語教育の中に視聴覚教育が導入された一つの理由があったのである．

入門期のほんの僅かの時期を除けば，全く場面とは無関係な教育を強いられていた英語教育界において，視聴覚教育の理論の導入と共に視聴覚教具，教材の研究がすすみ，何らかの手法を用いて教室の中に場面を設定し，多くの感覚を通じて教育が行なわれるようになったのは確かである．しかし教室での使い方を観察すると視聴覚教育の理論が，かなり誤解されているような面がしばしばみられるので，ここでその理論を再考する必要があるように思われる．

視聴覚教育では，ことば偏重の教育は，経験を伴なわない故に概念形成に役立たないという理由の基に，なるべく経験を，またそれが不可能であれば人工的な半具体的な経験を通して行なう教育が重要であるとしている．英語教育界で視聴覚教材を扱う場合に，必らず参考にされるのはDaleの理論である．彼は教育の中で学習者が使用する視聴覚教材を“経験の円錐”という図で視覚化している（図1）．それは，最も具体性の高い経験として，直接的，目的的経験（人工の手が加えられていない全く自然の場面の中での全身的経験）を一番下におき，学校教育の中で使われる各種の教材をその抽象度の増加にしたがって順次位置づけを行ったものである．その頂点には，全く実体のない，したがって最も抽象的と彼が考える言語的シンボルがおかれている．（ここでいう具体度，抽象度とは学習時の困難さの程度ではなくコミュニケーションのしやすさの程度と考えるべきものである．前の章でのべたように，母語国学習での概念形成は幼児の時からの全身的な環境への働きかけが，充分な時間を費してなされるものであ

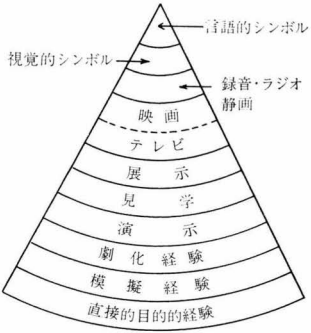

図1　経験の円錐

ったが，Dale の，学校における学習の面での概念形成もまた，教育者の手によって学習しやすく構成された環境，即ち contrived experience から上のいわゆる代行経験（vicarious experiences）への学習者自身の働きかけであって，そこから，一般化，概念化へ発展していくのが学習心理の点からみても最適であると考えるものである．これは彼によれば，実体のない言語偏重の学習による誤解や不可解を，出来るだけ避けるために，学習時に使用されることばを意味づける働きをする（代行）経験と共に学習すること，即ち多くの感覚を通して学習をすすめるのが，鮮明な概念化に最適だという考え方から出て来たものである．

Dale 自身のべているように，この経験の円錐は彼の理論を充分正確に表わしているものではない．例えば，ことばを最も抽象的なものとして頂点においているが，彼はことば自体にも具体性の高いものと低いものとがあることを認め，また，各段階の経験は，すべてことばと無関係なのではなく，その各々がことばと密接な関係をもたなくては学習は成立しないということを大要次のように説明している．

> ことばは，円錐の中の経験のどの段階とも関連をもつものである．例えば field trip であれば field trip の経験をしているうちに，同時に与えられることばの刺激を理解し，意味づけが行なわれ，概念形成に進むのである．したがって経験を与えずに，ことばだけで教えようとしても communication を困難にして，理解から概念形成にすすむ過程が非能率的となる．

経験の円錐の説明の中でもこの部分が極めて不十分であって，その理論づけが弱い上に，円錐形という視覚的シンボルを前面に打ち出して彼自身の理論を伝えようとしたところに，誤解を招いた原因があるのではないかと

考えることができる．

即ち，頂点にことばを置いたことにより，あたかも，ことばはその他の経験とは無関係であり，抽象度が高いために“ことばを避けて，具体的，代行的な経験によって学習させるのがよい”と主張しているような印象を強く与えてしまったように思われる．これは“多くのことばより1つの経験”という彼の基本的な教育理念を正に地で行ったために生じた誤解であろう．しかしわれわれはこの例により，視覚刺激がいかに強い印象を与えるものであるかということと，ことばと統一のとれない視覚的シンボルの提示はいかに学習を混乱させるかをよく銘記する必要があると思われる．視聴覚教材の使用法には細心の注意がいることも，この例でよく理解できるであろう．

Dale の理論は，概念の習得を目的とする教科のための学習理論であるから，それを技術習得を目的とする英語教育の中に，そのまま，導入することは極めて危険といわざるを得ないが，ことばという比較的抽象的なものを扱う場合には，参考にすべき点が数多くみられるであろう．

III 英語教育における“絵”と視覚心理

ここで問題をわが国の英語教育の中で使用されている“絵”に転じてみよう．上に母国語学習時の概念形成過程と視聴覚教育での直接経験及び代行経験による概念形成の概観をのべたのは，現在一般に行なわれている教室などでの絵の使用のしかたにはそれらの点からみて問題があると思われたのがその理由である．

わが国の英語教育を考える場合，先づ次の二つの悪条件に留意する必要がある．即ち，教室の中では，ことばの意味理解を助ける，環境から来る具体的経験が殆んど得られないことがその1つであり，今1つは，学習者の殆んどが，中学1年（13才）から学習を始めるのであるが，この時期はすでに，母国語の基礎的習得がすでに終った段階であるということである．

言語は場面との函数であることは多くの学問の分野で証明されていることであるが英語教育に使用する絵は，教室の中に存在しない現実の場面を，比較的現実に類似した場面に変えて，一時的に設定することが可能であるという点で，使用のしかたによっては非常に役立つ補助教具であるとされている．

再び Dale に戻るが，彼は絵による学習を，単感覚による学習であるとして，かなり抽象度の高い所に位置づけている．しかし絵は，その描き方により，具体性を高くして，より現実に近いものにすることは可能であるし，また同時にことばを使用することにより具体度をかなり高めることが可能で，半具体的な経験を与えることのできる便利な教材であると考えてよい．実際の経験からいっても，絵はその他の視聴覚教材と異なり，必要な時に必要なものを，生徒の能力に応じて自作することが出来，提示の際に時間的制約を受けず，しかも持ち運びや提示方法も至って簡単であるという利点を備えている．更に又，抽象度の高いことばのみによる場面設定の不明確さを減少したり，ことばではとうてい不可能な場面の転換がすばやく行なえる，など場面設定に関する絵の長所は数多くあげることができる．しかし以上のことはあくまでも，“正しい（適切な）絵を使用した場合”という条件の下においてであることは，常に念頭におく必要があろう．

外国語学習の場合，その言語材料は，学習者による意味づけがなければ学習は成立しない．この意味づけは母国語学習の場合と同じく，感覚を通じて行なうのが理解も正確であり，したがって，記憶保持にもつながることは心理学的にも認められていることである．物事の認識過程を，具体から抽象への概念の発展過程であるとする考え方は，言語や概念形成の学習の面でも認められているものであり，その意味でも学習は，ことばだけを媒体として行なうより，英語学習の場合には，場面を教室の中に持ちこんで行なう方がより効率的であると考えることは充分理解出来る．

この理由に基づいて，英語教育の特に低学年のクラスでは，学習することばの意味づけを促進するため，場面設定という理由のもとに抵抗なく絵が使用されていることは事実である．ことばのみの学習に加え絵を使うことは一つの代行経験による学習になるから，一応視聴覚教育の理論にも叶うものである．しかしこの絵が，果して学習を能率的にしているかどうかは甚だ疑がわしい問題である．

ここで“絵”の使用に関して留意せねばならぬいくつかの点について検討してみよう．

① 学習者にとって，絵の助けを借りない場面作りは可能である．

われわれが母国語で言語活動をする場合，話し手が外部からの刺激を受けて発話するまでに必らず何らかのイメージが頭の中に浮び，それが

ことばに意味づけをして，発話という行動に至らしめるという過程をとると解釈してよいであろう．英語教育の場合，絵は実際の場面の代理的役割を果すために使用されるものであって，教師の側では望ましい発話を促すことを目的として，絵という視覚刺激を与えているのである．前述のように，発話の際には必らず脳内にイメージ作りの段階を伴なうものであるが，絵は，学習者のイメージ作りをたやすくするための作用をも果してくれる．そこで留意せねばならぬことは，中学の低学年の段階で扱われる英語の言語材料は，抽象的な概念の表現は少なく，殆んどが具体性の高い表現の学習であるといってよい．具体性の高い表現は，母国語において，この具体性の高い表現は，Ⅰにのべた創造の時期に，実際の場面の中で主体的に操作し，構成しつつ一応学習を完了しているために，特に絵の助けを借りなくとも容易に，相手の発話のイメージを作り，又自分の発話の段階でもイメージ作りは簡単になされていると思われる．例えば Mother and Kathy are cooking in the kitchen. という文を聞き，話し，読み，書く練習を行なう場合のことを考えてみよう．母国語においては，この程度の意味のことばは，まさに場面の助けを借り，時間を費し，何回も同様な経験を重ね，それを一般化する過程において意味を理解し，自由に使用することが可能になるのである．しかし中学英語でそれと同じ程度の表現を学ぶ際には，自己自身の力で充分意味の理解は出来ると考えるのは誤りであろうか．わざわざ絵を提示することは，中学生の能力からみて非常に幼稚な手法であると考えられるのである．ピアジェによれば，学校に行く頃から自己中心語が消えて社会的思考が可能になるということであり，又10才以後に，一般に通用する思考方式が獲得されるということで，いづれにしても中学生程度では，すでに思考は可能であり，4～5才の幼児期にあっても，おとぎばなしなどをきいて理解することができるのであるから，中学生では英語であっても具体的な表現の学習においては，特に他律的な刺激によってイメージ作りを助けなくても，主体的に架空の場面を頭の中に描く能力は備えていると判断してよいと思われる．ことばだけで架空の場面作りを強いる方法を採用する方が，学習に適度の抵抗感が生じ，それに基づいて正しい聞きとりや発話へと導いてけば，成功感，成就感はそれだけ大きく，次の学習への動機づけにもなり，学習心理の面からみても中学生の年令に相

当した方法であると考えられる．

学習心理の中でも，学習は抵抗を少なくし成功感を数多く与えるのがよいとする意見もあるが，それは中学以下の低学年の生徒に当てはまるものだと解釈する．したがって中学校の段階においては，余りに幼稚と思われる絵は使用しない様に努めるとよい．絵は何回も使用できるという長所をもっているが，幼稚な絵をしばしば使うと学習意欲が減退する恐れがある．

② 想像力や連想能力の発達の妨害．

最近英語教育の中で，言語活動ということばの使用が著るしくなって来ているが，教室内で絵を使う場合には，学習活動と言語活動との区別をよく理解しておく必要がある．授業の中で新らしい語句や文型を理解し，表現するために，ある刺激に対して望ましい反応だけを得るよう control する手法を学習活動といい，1つの刺激に対していくつかの適切な反応を選択する訓練を言語活動といってよいであろう．

母国語学習においては，実生活の中に，同類の場面がしばしば反復生起するためにこの二つの学習は適当に混合され，新らしい場面においては適切な反応を選択すること（即ち，過去の経験の新場面への転移）が容易に行なわれ，1つの刺激を知覚すると，あとは個人の経験にしたがってそこから，さまざまな連想へと発展し，抽象概念に到達する．これによって母国語の言語活動は豊かさを増していくのである．

しかし英語学習においては，言語活動を円滑にすすめるには，その前の段階の学習活動において，正しい聞きとりや表現法を充分に練習しておかなければならない．この段階では前述のように刺激として与える絵も，連想の可能性を広げるというよりは，単に望ましい反応を生起させるためのものであるから，絵とそれに付随する発話との連合が強固となり，転移がおこりにくくなる．したがって，絵を学習活動だけに使用することは，想像力や連想の減退を招く結果になるといえるであろう．1つの刺激に対して1つの反応を求めるこの手法は英語教育に不可欠のものであり，上記の説明でも明らかなように，この方法のみによると応用力に欠ける面がみられるのは事実であり，第二次世界大戦末期の ASTP（アメリカ）の教授法の大きな欠点の1つである“応用力の不足”も，以上のような原因によるものであると説明できる．

この欠点を補なうためにも，与えられた刺激から適切な反応を選択し，自由な言語活動へと発展させる訓練を無視してはならないであろう．

③　学習事項と関連のない絵は，学習にマイナス

人間のどの感覚にも当てはまることであるが，外部からの刺激を知覚する場合に，その解釈のしかた（意味づけ）には大きな個人差がある，ということである．現実の場面から受ける刺激もその例外ではないが，現実を代行する絵は，自然の環境を２次元の世界に移すわけであるから，その絵の解釈の個人差は更に大きくなるといえよう．教室の学習場面では，この個人差をなくすために，教師は何らかの手法を用いて解釈の統一を計らなければならない．その結果ある生徒にとっては自分の解釈とはちがった解釈を強いられることもあり得ることであって，そのような場合は，その絵は，その生徒にとって，学習を助ける視覚シンボルの働きは全く無くなり，学習事項と無関係な抽象的シンボルにすぎない存在に変化してしまう．したがって教室内では，その抽象的シンボルと同時に与えられる言語材料の意味づけをたやすくするどころか，学習を非能率的にするばかりでなく，学習の不成立へと導くことになる．これは単に視覚教材を使えば場面の設定になるという安易な考えに基づくものであろう．

抽象的なシンボルを与えられて具体的な場面を連想し，しかも英語の発話に移すことは，言語の発達段階からいってかなり高度の段階で行われるものであって，中学程度の年代では無理であると言わざるを得ない．

この問題を解消するために，学習に使用する絵としては，何の説明を加えなくとも，それを提示しただけで望ましい発話を促がす動力として作用するものを準備すべきである．

また，解釈の個人差とは関係なく，最初から，発話と関係ないような絵は絶対に使用してはならない．

IV 実　例

ここでこれまでに公表されたものの中からいくつかを拾って考察してみよう．

次頁上の絵(図２)は中学二年の受動態の学習に使われたものである．最初にこの絵を使ってパン屋さんはパンを作る：A baker makes bread.：

図　2

から入りパンはパン屋さんによって作られる：Bread is made by a baker. の文に転換し学習する課であった．生徒は長い間絵を見せられ，能動態，受動態の文を帰納的な方法で指導され，以下6枚の絵によって受動態の文に作っていくやり方をとっていたが，この絵は能動の意味も受動の意味も表わしていない．どうみても“パン屋さん（これも不明瞭）がパンを持っている”としか解釈できないのである．

受け身の文を正確に視覚化することは，扱かう言語材料によって非常にむづかしいが，この場合少なくとも能動態の文が出て来るような絵を使用しなければ，時間をかけて絵を作成し使用する意味がないと思われる．

次の二枚（図3，図4）はNHK通信高校講座Ⅰに使われたものである．これは後に修飾語を伴なった過去分詞の形容詞的用法の説明で，それ全体が名詞を修飾する場合には，文が二つに割れて形容詞がその中に入るという学習事項である．視覚刺激の中でも動きのあるものは特に印象が強いことを利用して作成されたものであろうと思われるが必要なのは講師の上手な説明と，文を二つに割ってその中に別のものが入るという一寸した動きだけで充分であるように思われるが，これらの絵には余計な要素が多過ぎるし，また高校生のための視覚刺激としては次元が低すぎる感がある．図3の熊と，図4の自動車・リフトなどは文型の学習には全く関係がないし，講師の説明にし

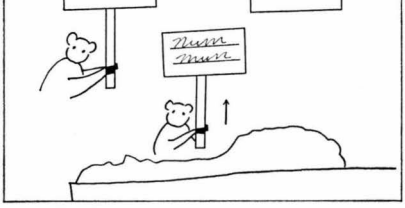

図　3

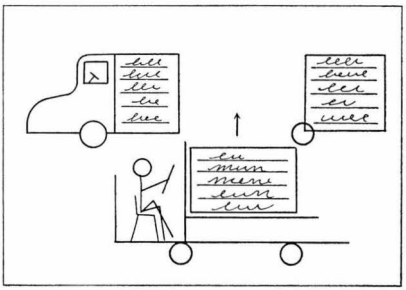

図　4

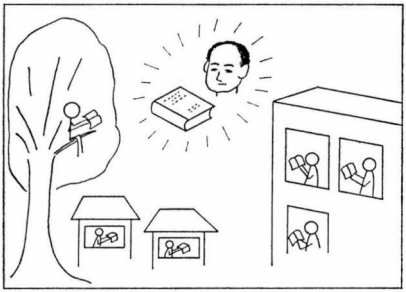

図　5

たがって熊が看板様のものをもって下から上って来たり，リフトカーの品物を上の方に動かしたりする様に作成されていたけれど，このような絵自体不必要であり，年令的にも興味を示さない．

次の絵(図５)は同じNHK通信高校講座Ｉの受動態の学習に使われたものであるが，視覚刺激としては，すぐれた例としてあげたい．彼の本は至る所で読まれている：His books are read everywhere. に使われたもので，ある程度の指導を受けた後であればこの絵から比較的望ましい文が作れるのではないかと思われる．

（注）　以上の図はすべて印象に基づき筆者が書き直したものである．

V　おわりに

本稿の始めにも述べた通り，中学高校の英語教育においては多感覚による学習がすすめられている．この小論では，英語教育と絵の関係について，母国語の習得過程と視聴覚教育の理論を基にして再考してみたのであるが，絵の描き方により，又提示のしかたにより，必ずしも効果的といえ

ない面がみられた．現場の教師達も，“多感覚による教育＝効果的”という考え方に疑問を抱きはじめ，それに関する実験もみられるようになって来たが，その結果は必ずしも多感覚による教育に有利なものばかりではなくなって来ている．その点英語教育誌上（1976年２月）に掲載された光山和雄氏の「英語聴解に及ぼす映像刺激の影響」という実験報告は，勇気ある画期的な研究といえよう．

授業中に絵を取り入れることは一見教師の積極性を表わすようであるが，問題はそこにあるのではなく，どんな学習者にはどんな種類の絵を，何の指導にいかに使用するかを考えることが問題なのである．それに教師は何よりも先づ，言語学習の原点に戻って絵の利用を研究し，充分な考察の結果，効果がみられないと予測できるところには絵の乱用を避けるべきである．それには言語学，心理学の知識が大いに必要になって来る．

ここで取りあげなかった大学の英語教育においても，聴覚教材と共に視覚教材を提示するのは教育の面での過保護的現象といえよう．彼等にとっては，ことばにより，頭の中に，主体的に場面を作って学習させる方が，自由なイメージ作りが出来て，想像の範囲も一枚の絵で限定するよりはるかに広いものとなるであろう．母国語学習から概念形成に至るまでの過程は，英語教育に参考にすべきことであるが，中学以上の年令になってからの英語学習が，幼児期から始まる母国語学習とどの点を異にするかを明確に認識し，それをどんな補助教具によって教えるのが心理学的にみて最も効果的かを研究することは重要なことである．

学習心理学では多くの法則の中でも，学習者に興味を喚起することに大きな意義を見出している．しかしある程度の年令に達した学習者達には，その授業の内容が容易に判ることに興味の喚起の第一段階があるのであって，視覚教材や聴覚教材を使うことにあるのではないということを，われわれ教師は充分理解する必要があろう．

以　上

参 考 文 献

言語と大脳：ペンフィールド，ロバーツ著
上村忠雄，前田利男訳　誠信書房　昭51
ことばの心理学：入谷敏男著，中公新書，昭40
ピアジェ心理学入門：フラベル著，植田郁朗訳，明治図書，1970
視覚の法則：W. メッツガ著，大智浩，金沢養訳，白揚社，1973

視覚コミュニケーション：宇野善康訳著，正栄社，1965
言語：Vol. 6, No. 11　大修館　1977
改訂学習心理学：辰野千寿著，金子書房，昭39
学習心理学：梅岡義貴・大山正著，誠信書房，昭44
学習心理学ハンドブック：波多野完治他，金子書房，1968
思考と言語：ヴィゴツキー著，柴田義松訳，明治図書，1972
岩波講座・哲学11・言語：服部四郎他，岩波書店，1968

論文執筆者

教　授	井口美登利
助教授	田島富美江
助教授	深沢俊雄
講　師	紙谷威広
講　師	佐藤秀一
講　師	蔭山友行

Nouns Converted from Verb-Particle Combinations

蔭 山 友 行

1.

現代英語，特に最近のアメリカ英語では Functional Shift (Conversion) と呼ばれる品詞の転用（機能推移）という現象がしばしば見られるようである．その中でもっとも多いのは *luxury* hotel (=luxurious hotel) の luxury のように名詞の形容詞としての機能への推移である．他方，各品詞の名詞への転用も盛んである．Kissinger on the *go* や America: A country on the *move*

That scene has been repeated many times in the unequal world of American education; at good schools, the "*haves*" always want to keep the "have-nots" out. (Newsweek, January 1, 1973)

など動詞 go, move, have の名詞への転用，さらには Education is a *must* if you want to get ahead. の must（必要不可欠のもの）のような助動詞の名詞への転用，また

The *Ups* and *Downs* of Economy

The War in Indochina——The *Ins* and *Outs* of Peace

(Newsweek, November 20, 1972)

のような前置詞あるいは副詞の名詞への転用さえ行われているのである．

2.

これらは単一の語の品詞が他の品詞に転用された例であるが２つの語が結合して動詞としての機能を果している Verb-Adverb Combination or Verb-Particle Combination[1]（動詞副詞結合　あるいは動詞と不変化詞の結合）においてもそれらが一語となり名詞にまで転化している例が数多くある．たとえば pay off という結合を例にとると次のようになる．

The effort *pays off* in the long run.

It is unlikely that a shrewd money man like Tanaka would not at least know about *payoffs* in the deals. (Time, August 9, 1976)

以下このような動詞としての結合とその名詞への転化の例をいくつか挙げると次のようになる.

follow up と follow-up の例

The President was most concerned about the fighting in Cyprus, which directly affected two of the U.S.'s NATO allies, Greece and Turkey, but he was also anxious to *follow up* on his assurances that he would pursue the Nixon Administration's foreign policy.

(Time, August 26, 1974)

Under these circumstances, there seems little prospect of an immediate *follow-up* to the theme struck during a Paris EEC summit last October that called for "transforming, before the end of the present decade...the whole complex of the relations between member states into a European Union." (Newsweek, January 1, 1973)

(1) A ten-month campaign by some of the highest past and present officials of the Nixon Administration to *cover up* their involvements was crumbling. (Time, April 30, 1973)

(1′) McCord's talk electrified the hearings—and sent the panel off full-tilt in pursuit of the story of the Watergate *cover-up*.

(Newsweek, May 28, 1973)

(2) A month ago, Weidenbaum began working out the details of a wage-price freeze; at the same time Volcker *stepped up* his study of the specifics of cutting the dollar loose from gold.

(Time, August 30, 1971)

(2′) Most were routine queries about wage *step-ups*, promotions, rent rises and the prices of everything from cigarettes to cars.

(Newsweek, August 30, 1971)

(3) Schlesinger seems just the man to *shake up* the CIA.
A seasoned scholar, bureaucrat and Republican, he enjoys the confidence of President Nixon. (Time, April 30, 1973)

(3′) THE CIA—The Big *Shake-Up* in a Gentleman's Club

(Time, April 30, 1973)

(4) For the Administration recognizes it is impossible to adjust for inequities under a freeze, and the injustices *build up* so rapidly that 90 days is almost the outside limit the U.S. could tolerate. (Newsweek, August 30, 1971)

(4′) It was discontinued in 1969 to slow down the racing economy that resulted from the Viet Nam *buildup*.

(Time, August 30, 1971)

(5) Last week Taiwan made it "crystally clear" to Japan's unofficial emissary Osamu Itagaki that it would rather *cut off* Japan Air Line's enormously profitable Taipei-Tokyo run than accept Tanaka's arrangement. (Time, March 18, 1974)

(5′) It is unlikely, though, that Libyan Leader Colonel Muammar Gaddafi, a blunt critic of the U.S., would permit a meeting in Tripoli that was likely to lead to an elimination of the oil *cutoff*. (Time, March 18, 1974)

(6) His trip to China is almost certain to bring him political rewards, but come Election Day 1972, mending the nation's pocketbook could *pay off* at the polls as Peking never would.

(Time, August 30, 1971)

(6′) It is unlikely that a shrewd money man like Tanaka would not at least know about *payoffs* in the deals.

(Time, August 9, 1976)

(7) Finally, at 2: 24 p.m. EST on Tuesday, Dec. 19, the spacecraft *splashed down* 350 miles southeast of Samoa.

(Newsweek, January 1, 1973)

(7′) On the eve of their *splashdown*, the astronauts held a press conference in space, answering newsmen's questions relayed to them by Mission Control. (Time, January 1, 1973)

(8) Washington's policies toward China had hardened almost as soon as the Communists *took over* that country in 1949.

(Time, April 26, 1971)

(8′) Several times, however, Mr. Nixon added the qualifier that all he expected of Vietnamization was that it leaves Saigon with "not the sure capacity but at least the chance" to prevent a Communist *take-over*. (Newsweek, April 26, 1971)

以下，名詞だけの用例を示すと，

(9) Similar *markups* in the bill for German cameras, Swiss watches, and British tweeds will soon hit the American buyer.
(Newsweek, August 30, 1971)

(10) On the contrary, his third term constituted in many respects a disappointing *letdown* from the high quality of his first two. (NYT, Oct. 25, 1970)

(11) It is recognized that the impact of a *change-over* to metric standards would be felt chiefly by industry and commerce.
(NYT, Sept. 6, 1970)

(12) You see, Shirley, children come into this world without any *hangups* about color or anything else. We *grownups* are the ones who give it to them. (TEC, Dec. 1971, p. 30)

(13) The *speedup* in college studies is a major recommendation of the Carnegie Commission on Higher Education, which reported on November 23:
(U.S. News & WORLD REPORT, Dec. 7, 1970)

(14) ...,for this would strengthen the U.S. argument that a peace-keeping force is necessary to maintain the Middle East *standoff*. (Time, April 26, 1971)

(15) In addition, this uprising, like the recent California prison *flare-ups* from Soledad to San Quentin, signaled a rising militance within the prison population.
(Newsweek, Sept. 27, 1971)

(16) "There is an unreasonable *stretchout* in formal education," Dr. Wilson said.
(U.S. News & WORLD REPORT, Dec. 7, 1970)

(17) Then, in a surprise twenty-minute TV address Sunday night,

the President unveiled a stunning *turnabout* in economic strategy a bold new program in its way as dramatic and momentous as his recent China initiative.

(Newsweek, Aug. 23, 1971)

(18) I mean, this total *freeze-out* on details for big Ray.

(Erich Segal: *Love Story*, p. 34)

(19) Last week, because of a *foul-up* in finding an interpreter, Washington allowed Sato only a ten-minute warning of its latest bombshell. (Time, August 30, 1971)

(20) Since the *breakup* of the tanker Torrey Canyon in 1967, Britain's south shores have been regularly lacquered by hundreds of thousands of barrels of crude petroleum.

(Newsweek, April 26, 1971)

(21) The French do not advocate withdrawal of the 310,000 U.S. troops now in Europe, but their recent obduracy may well strengthen the pressures back in Washington for a *pullout*.

(Time, March 18, 1974)

(22) Separatist suspects in Jackson: *Shoot-out* at the new capital

(Newsweek, August 30, 1971)

(23) Until then, passengers on many runs face equipment *breakdowns* and a decline in comfort. (Time, March 18, 1974)

(24) All the gains would evaporate at once; prices would rise sharply to make up for the *hold-down*, and wages would jump to keep pace. (Time, August 30, 1971)

(25) Although too respectable to associate openly with the Blue Storm, Fukuda would have its support in a *showdown* with Tanaka. (Time, March 18, 1974)

(26) That required a *draw-down* in gasoline inventories that, if repeated, could have serious effects later this year unless the Arab embargo is eased. (Time, March, 18, 1974)

(27) The product *tie-ins*, valued at $6 million, were designed to "create a third level of awareness," says Paramount Promotion

Director Charles Glenn. (Time, March 18, 1974)

(28) The political *turn-around* was formalized on the national level in the spring of 1969 at the Ninth Party Congress.

(Time, April 26, 1971)

(29) What prompted the *turnabout?* Earlier in the year, Nixon ruled out a tax cut as a means of restarting the economy.

(Time, August 30, 1971)

A.G. Kennedy はこのような Verb-Adverb Combination より転化した名詞のことを Combination Nouns（結合名詞）と呼び次のように述べている[2)].

Perhaps the newest creations or adaptations in present-day English may be said to consist largely of these combination nouns.

今から50年以上も前の1920年に Kennedy が「現代英語の最も新しい創造と適応は，おそらく主としてこれらの結合名詞から成っていると言えるかも知れない」と予見したこの Combination Nouns は，その後も現代英語の中で急速な増加の一途をたどっているのである．

3.

次に最近7年間（1971—1977）のアメリカの新聞・雑誌，主に Time, Newsweek, The New York Times より集められた115の結合名詞を動詞の後に位置する Particle によって分類すると次のような結果が得られる．なおカッコ内の数字は OED によって調べた初出の年度である．

UP holdup (1885), speedup, pickup (1860), step-up, roundup (1769), linkup, smashup (1858), closeup, tie-up (1714), crackup, tuneup, windup (1665), change-up, walk-up, put-up (1891), setup, checkup, shake-up, shakeup (1873), follow-up, hangup, makeup (1821), pile-up, close-up, pin-up, line-up, lineup, flare-up (1859), set-up, break-up, cover-up, letup (1856), let-up, backup

OUT pullout, shootout, freeze-out, sellout, tryout, share-out (1906), strikeout, shutout, holdout (1893), turnout (1866), readout, black-out, cop-out, print-out, fade-out, handout, fallout, pop-out, drop-out, walkout (1919), blow-out (1826), knock-out (1854), lockout

(1860), layout (1888), check-out

OFF playoff (1906), standoff (1883), kickoff (1857), spin-off, lead-off, turnoff (1889), cutoff (1741), drop-off, liftoff, blast-off, ripoff, sign-off, layoff, take-off (1826), payoff, come-off (1634), trade-off

DOWN knockdown (1698), letdown (1768), slowdown (1897), touch-down, rundown, breakdown (1832), shakedown (1730), crackdown, splashdown, put-down, showdown (1898), clampdown, countdown, crankdown, shutdown (1889), draw-down, hold-down

IN check-in, teach-in, sit-in, love-in,drive-in, break-in, tie-in

OVER turnover(1660), holdover(1888), take-over, stopover (1893), change-over (1920)

OTHERS come-on, clip-on, breakthrough, follow-through (1879), turnabout (1598), turnaround, go-round, cutback, rollback, come-back (1825), flashback, pullback (1698), setback (1674)

Particle によって分類された結合名詞の数を見ると UP.....30 OUT.....25 OFF.....17 DOWN.....17 IN.....7 OVER.....5 BACK.....6 ON.....3 その他若干の about, around, through との結合が見られ up, out, off, down のように副詞的性格の強い動的な particle に結合名詞が多く全体の結合の約 80 %を占めていることがこの調査から分る.

4.

今度は動詞の面からこれらの結合名詞の分類を考えてみよう. Kennedy は動詞副詞結合を構成する主要な基本動詞を 25 個挙げているが 今これらの基本動詞別に集められた資料を分類し, その数を表で示すと次のようになる.

back.....backup

blow.....blow-out

break.....breakup, breakdown, break-in, breakthrough

bring.....

call.....

come.....come-off, come-on, comeback

fall.....fallout

get.....
give.....
go.....go-round
hold.....holdup, holdout, holdover, hold-down
lay.....layout, layoff
let.....let-up (letup), letdown
make.....makeup
put.....put-up, put-down
run.....rundown
set.....setup(set-up), setback
take.....take-off, take-over
turn.....turnout, turnoff, turnover, turnabout, turnaround
work.....
do.....
fix.....
look.....
pull.....pullout
shut.....shutout, shutdown

この結果から turn がもっとも多い5個の結合名詞を作り，以下 break, come, hold といった動詞が後に続いている．また，これら25の基本動詞との組み合せによって作られる結合名詞は合計で35個となり資料全体の約30％を占めていることが分る．一方，資料として集められたすべての結合名詞を構成している動詞は，この資料で見る限りすべてが one-syllable の動詞であることも注目に値する．そして，これらの個々の動詞についてその動詞が，本来，動詞としての機能しか持っていないものなのか，あるいは動詞としての機能の他に名詞としての機能をも兼ね備えているかを検討してみると，次の7つの結合 fade-out, come-off, slowdown, sit-in, teach-in, come-on, come-back における fade, come, slow, sit, teach の5つの動詞の他はすべて動詞と名詞の両機能を持ち合せているという結果が得られる．これらの動詞の数は全体の96％近くにもなっている．これらのことから Verb+Particle の結合が名詞化される場合の動詞は，一般によく知られた基本動詞に多く，圧倒的にそれ自体で名詞としての機能をも

備えた単音節の動詞であると言える.

5.

資料として集められた結合名詞の例を 3. で調べた OED による初出の年度別で分けると次のようになる.

1501—1600	1	1601—1700	7	1701—1800	5	1801—1850	5
1851—1900	20	1901—	73				

1937年に U. Lindelöf が NED をもとに結合名詞の例を 1377 年初出の run-about から年代順に約 430 挙げているが[3], それによると

1500年以前のもの	4
1501—1600（16C）	25
1601—1700（17C）	27
1701—1800（18C）	34
1801—1850（19C 前半）	75
1851—1900（19C 後半）	181
1901 以降（調査の時点まで）	84

この Lindelöf の調査によっても, また今回の調査でもこれら結合名詞の数は19C後半から増えはじめ特に今世紀に入ってからの急激な増加が顕著である. なお, 初出の年度が書いてないものは, OED が 1930 年頃までの例しか扱っていないためで, それらはそれ以降の特に近年になって使われるようになったものと推測される.

今, この結合の歴史的な発達の過程をみると OE では outlet, income, downfall, overthrow, outbreak, downthrow, forgive, overtake, understand, withstand など非分離接頭辞 (inseparable prefix) のついた複合動詞 (verb-compound) が多く作られた. ME 以後はこの verb-compound は増え, これに代って verb+particle の結合が発達していった. そして ModE 初期よりこの結合が急速に増加し, その後にこれらの結合のいくつかは one word になり名詞に転化していったと思われる. 以下, いくつかその用例を示すと次のようになる.

Verb-Compound ⟶ Verb-Particle Combination ⟶ Combination Noun

outbreak (1602) ⟶ break out ⟶ breakout (1820)

outlet (1250)	⟶	let out	⟶	let-out (1836)
downfall (1300)	⟶	fall down	⟶	fall-down (1829)
downthrow (1615)	⟶	throw down	⟶	throw-down (1903)
income (1300)	⟶	come in	⟶	come-in (1870)
overthrow (1513)	⟶	throw over	⟶	throw-over (1819)

6.

ドイツ語の分離動詞，たとえば einsteigen, umsteigen, aussteigen, züruckgehen などの動詞は次の例文のように文中で分離されても V—V′ が緊密なワク構造で結合し，両者（V—V′）で1つの概念を表している．

V……ワク……V′

ein ¦ steigen　Ich *steige* in München *ein*.

um ¦ steigen　Ich *steige* in München *um*.

aus ¦ steigen　Ich *steige* in München *aus*.

V……ワク……V′

züruck ¦ gehen　Er *geht* nach seiner Heimat *züruck*.

(He goes back to his native country.)

英語の場合でも次のように particle の位置にかかわらず Verb (V) と Particle (V′) で緊密に結合し，ひとつの考え，行動を表したり，結合して新しい意味を獲得しているので Verb+Particle でやはり V—V′ の一種のワク構造を成していると考えられる．

The lawyer *got* *off* the prisoner.
　　V　V′

The lawyer *got* the prisoner *off*.
　　V…… ワク ……V′

We *got* *in* the report.⟶We *got* the report *in*.
　　V　V′　　V……ワク……V′

He *gave* *up* his smoking.⟶He *gave* his smoking *up*.
　　V　V′　　V…… ワク ……V′

He *brought* *back* the things we lost.
　　V　V′

He *brought* the things *back* that we lost.
　　V……ワク……V′

He *brought* the things we lost *back*.
　　V……ワク……V′

このようにドイツ語の分離動詞と英語の Verb+Particle の結合との間には緊密なワク構造という類似性が見られるが，ドイツ語とこの結合との関

係について次のように Simeon Potter は述べている[4].

Phrasal verbs are characteristic of the German languages. You will find few in the Romance or Slavonic tongues. Some English writers, like Johnson and Gibbon, use them rarely.

7.

1967年に Anna H. Live がこの Verb+Particle の結合上の特徴を分析するために，object の位置が verb と particle の間にくるのか，それとも particle の後に置かれるか，すなわち mid-position か post-position か，また stress が verb と particle のどちらに置かれるかなどについて次のような分類基準を設け，各結合がこの分類のどこに属するかをひとつの表にして Table of Verb Combinations としてまとめている[5]．この表に使われている記号は次の6個である．

The symbols used in the tables are:

M {pronominal mid-object; noun-object position optional, stress on particle in passive.

M_1 like M, but noun-object almost always in mid-position

P {object in post-position stress on verb component in the passive.

X "idiom"—no passive, stress on particle

※ "idom"—no passive, stress on verb component

～ metaphorical

(A.H. Live, 'The Discontinuous Verb in English')

そして，この中の M—construction と P—construction の例，さらに各々の passive transformation の model は次のようになる．

M—construction

N_1 V ProN Pa
(Mary toned it down.)

N_1 V N_2 Pa
(Mary toned the radio down.)

N_1 V Pa N_2
(Mary toned down the radio.)

(passive transformation)

N_2 / →ProN } be Ven Pá (by N_1)

The radio / It } was toned dówn (by Mary).

(Pa representing "particle")

P—construction

$$\left.\begin{array}{l} \underset{\text{(The members voted on the contract.)}}{N_1 \quad V \quad Pa\, N_2} \\ \underset{\text{(The members voted on it.)}}{N_1 \quad V \quad Pa\ ProN} \end{array}\right\} \rightarrow \left.\begin{array}{l} N_2 \\ ProN \end{array}\right\} \text{be Vén Pà (by } N_1\text{)} \qquad \left.\begin{array}{l} \text{The contract} \\ \text{It} \end{array}\right\} \text{was vôted òn (by the members).}$$

そこで，どのような結合上の特徴をもった Verb-Particle Combination がそれに対応する Combination Noun に転化するのかを調べるため，この Table of Verb Combinations と集められた資料とを照合し分類すると次のような結果が得られる．

M ——step-up, holdup, pickup, closeup, tie-up, windup, tuneup, put-up, setup, close-up, pin-up, sellout, readout, handout, blow-out, kickoff, turnoff, breakdown, countdown, shutdown, try-on……20

$\underline{M}$ ——shake-up, follow-up, hangup, makeup, breakup, tryout, shut-out, holdout, turnout, dropout, knock-out, layout, drop-off, layoff, take-off, payoff, knockdown, letdown, rundown, shakedown, put-down, turnover, put-on, cutback, setback ……25

M_1 ——walk-up……1

$\underline{M}_1$ ——holdover, take-over, follow-through……3

P ——sit-in……1

X ——let-up, shootout, fade-out, fall-out, playoff, standoff, come-off, crackdown, stopover, breakthrough, comeback, draw-back……12

M_1P —drive-in……1

$\underline{M}_1\underline{P}$ —run-through……1

(M……20, $\underline{M}$……25, M_1……1, $\underline{M}_1$……3, P……1, X……12, M_1P……1, $\underline{M}_1\underline{P}$……1)

この結果，$\underline{M}$ 型結合の数がもっとも多く，M, $\underline{M}$, X型の3つの結合で全体の約90％を占めている．このことから名詞に転化しやすい Verb+Particle の結合は，

(1) 目的語としての代名詞は mid-position

(2) 目的語としての名詞は mid-position または post-position

(3) particle に stress が置かれる

(4) idiom として，また metaphorical な用法で用いられる

以上の4つの特徴をもっていることが分る．

8.

次に，この結合名詞の語形の変化の過程を考察してみよう．今，break-through という語を例にとると，この結合名詞が使われるようになった今世紀初めの頃は次に示すヘミングウェイの作品の中の例のように Verb と Particle とが分離されたままの形で名詞として使われていたようである．

We heard that the attack to the south had been unsuccessful. They did not attack that night but we heard that they had *broken through* to the north.（動詞としての用法）

I asked about the *break through* and he said that he had heard at the Brigade that the Austrians had broken through the twenty-seventh army corps up towards Caporetto.（名詞としての用法）

(E. Hemingway, *A Farewell to Arms*, 1929)

その後，発達につれてハイフンで結ばれ複数変化さえ見せるようになってくるのである．

Every now and then, in the efforts to push out the boundaries of our cumulative knowledge, a *break-through* into new understanding necessitates a reorientation of the knowledge gained previously. In linguistic science such *break-throughs* have occurred several times.

(Charles C. Fries, *Advances in Linguistics*, 1961)

その内のいくつかは，最近になって現代英語の中に深く定着するに従って one word として solid につづられるようになってきたのである．

Linguistic research has produced, and is currently producing, results which constitute something of a *breakthrough* in the study of the operations and behavior of the human mind.

(Jacob|Rosenbaum, *English Transformational Grammar*, 1968)

All seem worried that in an effort to counter his bad press with some foreign "*breakthroughs*", Mr. Nixon may give away too much

to Moscow in future disarmament talks.

(Newsweek, May 28, 1973)

この break through→break-through→breakthrough に至る変化の過程は weekend という名詞の week end→week-end→weekend という語形変化と類似しており，概して結合が強くなるにつれて one word になる傾向が見受けられる．そして，形の変化と共に weekend の（週末）という意味内容も変化してきたように breakthrough という結合名詞も最初は軍事面での（敵陣突破）という意味で使われていたが，最近では軍事面に限らず政治，経済，外交など各分野での難問に対する（突破口）という意味で広く現代英語の中で使われていることは，語形変化に併う意味変化という点で興味深い事実である．

結合名詞の形については，OED の break-down の項に次のような説明がある．

...but in familiar and well-establisned expressions, there is a tendency to take the combination without analysis as a single word,...

そして，one word として solid につづるのが最近の journalistic な英語の傾向でもある．アクセントは名詞になると頭部移動の傾向が見られ，結合名詞は分割のできないひとつの語と同じように取り扱われ bréakdòwn または bréakdown となることが多い。

break dówn⟶bréakdown

break thróugh⟶bréakthrough

OED もこの結合名詞のアクセントについて flare-up の項で次のように述べている．

The stress is variable, but most commonly falls on the first syllable.

9.

このような結合が現代英語の中で急激に増加してきた原因について A. G. Kennedy はまづ figurative change（比喩的な転用）が可能であることを挙げ，その他，次の 4 つの原因を指摘している[6]．

1. a desire to strengthen or emphasize the idea expressed by the simple verb
2. the ever-present desire to vary the expression of an idea

3. a desire for rhythmical effect
4. mere linguistic laziness, that is, a desire to use simpler combinations rather than take the trouble to learn the more highly specialized derivative verbs.

make out.....comprehend, put out.....extinguish
use up.....exhaust, bear out.....corroborate

これらの他にこの結合が英語のもつ分析的(analytic)傾向に合致することやアメリカ英語の colloquial style には簡潔でスピード感のある allegro-form (快速調)をとろうとする一般的な傾向があるが，この結合の使用がその傾向ともうまく合致することなどが考えられる．このように Verb+Particle の結合を使うことによって直観的，視覚的，具体的で vivid な表現上の効果をもたせることができ，同時に単一動詞とまったく違った新しい意味の創造が可能となってくるのである．

10.

Verb+Particle の結合は，今まで見てきたように本来の動詞としての用法から転じ，名詞として用いられているのであるが，そのうちのいくつかは，さらに進んで

Lockheed *Payoff* Scandall の Payoff のように限定的に名詞の前に置かれ形容詞的に用いられているのもある．

Within six months, he delivered a *shake-up* talk to his board of governors. (Newsweek, August 16, 1971)

For instance, one Sunday when some other guys and I were over there for hot chocolate, he showed us this old *beat-up* Navajo blanket that he and Mrs. Spencer'd bought off some Indian in Yellow-stone Park. (J.D. Salinger, *The Catcher in the Rye*)

また，この結合の動詞の部分に本来動詞としての機能をもたない形容詞や名詞が用いられ動詞の代用をしているケースも最近では若干見られる．

The one last great service that Mr. Nixon can now perform for his country is to resign. He has been trying to "*tough* it *out*" for too long at too great a cost to the nation.

(The New York Times, November 4, 1973)

But even if Washington *lucks out*, it will face tough going in the General Assembly. (Newsweek, Sept. 26, 1971)

In addition, they are *cozying up* to Japan's trading partners: Mitsubishi now sells American urea fertilizer in southeast Asia, and Mitsui sells U.S. soybeans in Germany and German chemicals in Venezuela. (Time, April 30, 1973)

結合名詞やこれらの例に見られるような

Verb+Particle⟶Noun

Noun+Particle⟶Verb

Adjective+Particle⟶Verb

といったような機能推移はある意味でこの結合のもつ結合力の強さと豊かさを証明しているように思われる．一般的にこのような語の形を変えずにかなり自由にFunctional Shiftを行うことは，イギリス英語よりもアメリカ英語の方に広く見られる傾向のようである．

この点についてH. Alexanderは次のように述べている[7]．

American English shows a greater freedom than British English in changing the function of a word without any corresponding change in form, a feature which was characteristic of Elizabethan speech.

このようなFunctional Shiftがエリザベス朝時代の英語の特徴であったと言うのである．そしてMarckwardtの指摘するようにアメリカ新大陸に移住してきた初期の人々はエリザベス朝時代の英語を話しており，そのことがその後のアメリカ英語の形成と発達に影響を与え，アメリカ英語というものの特徴を生み出していったのであるから，エリザベス朝時代の英語に特徴的であったFunctional Shiftが現代のアメリカ英語の中に広く認められたとしてもそれは当然であると言えよう．

In short, the earlist English colonists in the New World were speaking Elizabethan English, the language of Shakespeare, Lyly, Marlowe, Lodge, and Green,.....This is important and necessary for our understanding of some of the distinctive features which American English was to develop later on.[8]

以上考察してきたように，単一の語の品詞が変化するだけでなく，結合名詞のように品詞のまったく異なる2つの語が結合して別の品詞に転化する

という現象は，ある意味でアメリカ英語のもつ flexibility を示しており，今後さらに増加していくことは容易に推察できる．そして，このようにかなり自由に機能の推移が行われることは，将来，少なからず英語の構造や性格を変える可能性をもっているように思われるのである．

注

1) B. Fraser, *The Verb-Particle Combination in English*, 1974.
2) A.G. Kennedy, *The Modern English Verb-Adverb Combination*, 1920, p. 47.
3) U. Lindelöf, *English Verb-Adverb Groups converted into Nouns*, 1937.
4) S. Potter, *Changing English*, London, 1969, p. 136.
5) A.H. Live, *The Discontinuous Verb in English*, 1967.
6) A.G. Kennedy, *Current English*, Ginn, 1935, p. 302.
7) H. Alexander, *British and American English: Differences in Vocabulary*.
8) A.H. Marckwardt, *American English*, New York: Oxford University Press, 1958, pp. 10—11.

『The Pearl の文体と善悪について』

深　沢　俊　雄

（1）

The Pearl は，アメリカのノーベル賞作家，John Steinbeck (1902—68) によって，1947年に発表されたものである．

この作品は，貪欲な白人の医者や，狡猾な真珠の仲買人や真珠を奪おうとする人々に絶えず悩まされ，悪と戦い続ける素朴なメキシコインディアンの漁師である Kino 一家の物語である．

そして，あがいてもあがいても邪悪なものにつきまとわれ，どこまでも執拗に Kino 一家を追って来る追跡者たちによって代表される社会は，残酷無慈悲な邪悪な社会であり，かつまた，貧しくて無知である人々は，どうもがいても幸福をつかむことができないもう一つの社会が，Kino の見つける世界一大きな真珠と善悪との交錯を中心に描かれている．まさにこの点においては，*The Grapes of Wrath* のJoad 一家の物語と共通しているといえよう．

一方，政治色や思想性にこだわらず，素朴な喜びや悲しみ，善意や不幸などに愛情こまやかな目を向けて，そこに真の人間性を見いだそうとしている点では，*Of Mice and Men* や *The Red Pony* などの作品と共通しているといえよう．

以上のような観点から，*The Pearl* における善悪の問題および Style 等について考察してみたいと思う．

（2）

この作品は，全体が六章から構成されていて，各章ごとに climax が設定されている．*The Grapes of Wrath* では，奇数章でほとんど客観描写のみによる inter-chapter を展開し，偶数章では narrative-chapter を展開して，全編を構成している．また *Of Mice and Men* では，dialog の箇所

だけをとりだしてみると，そのまま芝居のせりふになるように構成されている．この作品も後者のジャンルに属している．すなわち，play-novel という形を採っている点が，この作品構成上の特色であるといえよう．また，動物や生物を登場させ，自然との対比によって，主人公 Kino の周辺に活発な動きや生命を与えることにより，作品全体を生き生きとしたものにしている．すなわち：

The roosters had been crowing for some time, and *the early pigs* were already beginning their ceaseless turning of twigs and bits of wood to see whether anything to eat had been over-looked. Outside the brush house in the tuna clump, *a covey of little birds* chittered and flurried with their wings. (Chapter I, P. 1)

And *a goat* came near and sniffed at him and stared with its cold yellow eyes. (Ibid., P. 2)

The ants were busy on the ground, big black ones with shiny bodies, and little dusty quick ants. (Ibid., P. 3)

A thin, timid dog came close and, at a soft word from Kino, curled up, arranged its tail nearly over its feet, and laid its chin delicately on the pile. (Ibid., P. 3)

Near the brush fence *two roosters* bowed and feinted at each other with squared wings and neck feathers ruffed out.....Kino watched them for a moment, and then his eyes went up to *a flight of wild doves* twinkling inland to the hills. (Ibid., P. 4)

Down the rope that hung the baby's box from the roof support *a scorpion* moved slowly. His stinging tail was straight out behind him, but he could whip it up in a flash of time. (Ibid., P. 5)

The brown algae waved in the gentle currents and the green eel grass swayed and *little sea horses* clung to its stem. *Spotted botete, the poison fish*, lay on the bottom in the eel-grass beds, and *the bright-coloured swimming crabs* scampered over them.

On the beach *the hungry dogs and the hungry pigs of the town* searched endlessly for any dead fish or *sea bird* that might have floated in on a rising tide. (Chapter II, P. 14)

Swarms of fish lived near the bed to live near *the oysters* thrown back by the searching men and to nibble at the shining inner shells.
(Ibid., P. 17)

He felt alone and unprotected, and *scraping crickets and shrilling tree frogs and croaking toads* seemed to be carrying the melody of evil. (Chapter III, P. 30)

And the *night mice* crept about on the ground and *the little night hawks* hunted them silently. *The skinny black puppy with flame spots* over his eyes came to Kino's door and looked in.
(Ibid., P. 35)

He felt the creeping of fate, *the circling of wolves, the hover of vultures.* (Ibid., P. 53～54)

He heard every little sound of the gathering night, *the sleepy complain of settling birds, the love agony of cats.* (Ibid., P. 58)

The late moon arose before *the first rooster* crowded.
(Chapter V, P. 62)

Already *the dawn birds* were scampering in the bushes.
(Ibid., P. 67)

The coyotes cried and laughed in the brush, and *the owls* screeched and hissed over their heads. (Chapter VI, P. 74)

The animals from miles around came to drink from the little pools, and *the wild sheep and the deer, the pumas and racoons, and the mice* all came to drink.....And in the pool lived *frogs and water-skaters*, and *water-worms* crawled on the bottom of the pool..... *The cats* took *their prey* there, and strewed feathers and lapped water through their bloody teeth. (Ibid., P. 85)

But the might was not silent; *the little tree frogs* that lived near the stream twittered like *birds*, and *the high metallic ringing of the cicadas* filled the mountain cleft. (Ibid., P. 91)

A crab scampering over the bottom raised a little cloud of sand, and when it settled the pearl was gone. (Ibid., P. 97)

このように，大小さまざまな生物が主人公 Kino にとっても，また作品

の場面設定の上からも重要な役割を果たしている．この作品から，これらの生物を省いてしまうと，物語そのものが，間が抜けた活気のないものとなってしまう．上記引用にもあるように，特に，この作品に及ぼすサソリの影響は非常に大きく，Kino 家の運命を方向づける役割を果たすと同時に，作品展開の起動力となっている．すなわち，つり箱の綱をつたわって，愛児コヨティートの寝ているつり箱をめがけて降りようとするサソリの姿は，まさに Kino 夫妻にとっては悪夢であり，Kino 一家に災いや不幸を引き起こす原因となっている．その災いから愛児コヨティートを守るために，Kino の妻，Juana は古来の呪（まじない）を繰り返したり，マリア祈願を唱えたりする．一方，Kino も行動を起こし，部屋を横切って両手の掌を下にして，サソリをつかまえようと，片手をサソリの方へ伸ばすのであるが，Kino の手が殆んど届きそうになったときに，サソリは危険の迫ったことを感じて，しっぽの反った針を背にぐいとあげ，攻撃の姿勢に入るのである．Kino は身じろぎもせずに立っていたが，Juana はふたたび古い呪（まじない）をつぶやいた．Kino が再びサソリをつかまえようとすると，サソリは彼の指をかすめてコヨティートの肩に落ちて刺した．すると Kino は唸りながらそれをつかみ，両手でぐしゃぐしゃすりつぶし，それを下にたたきつけ，こぶしで土間にたたき込むのである．まさに Kino の行為そのものが悪に対する復讐であり，Kino の中にあるすべての憎しみを象徴しているのである．

Kino のサソリに対する怒りは，敵という言葉によって表現され，それが悪の調べとなり，Kino にとって憎しみと化していくのである．すなわち，悪に対する Kino の心の葛藤が，怒りをこめて次のように描かれている．

> But Kino beat and beat stamped the enemy until it was only a fragment and a most place in the dirt. His teeth were bared and fury flared in his eyes and the Song of the Enemy roaded in his ears. (Chapter I, P. 6)

これはまさに，怒りの葡萄に見られるオクラホマの農地を失って，カリフォルニアへと移住してゆく Joad 一家によって代表される農民の運命に類似するものである．

ところで，Juana は愛児コヨティートの傷口に唇を押しあてて，毒を吸

い出そうとしてやるが，傷口は堅いリンパ腺状のしこりとなって，その周囲に広がってゆき，幼児の悲鳴が近所の人々を呼び集め，彼らにサソリに刺されたことを知らせる結果となるのである．Kino と Juana はコヨティートを医者のところへ連れてゆくが，集まった隣り近所の人々も行列をつくり，二人の後について市（まち）へと向かうのである．行列の人数はしだいにふえて，その行列に馳せ参じた者たちは，幼児がどうしてサソリに刺されたか，父親と母親がどうして幼児を医者に連れてゆくのかを教えられるのである．この行列に加わった者たちの中には，金銭上の事柄にとてもたけた教会の前にたむろしている乞食たちもいて，彼らは，Kino や Juana の服装等について，すばやく一瞥（いちべつ）を投げて，その良し悪しを見分けたり，市（まち）のあらゆることを知っていた．そして，教会にざんげのために出入りする若い女性の様子を見ては，罪悪の種類を判別するのであった．たとえば，

> And the new comers, particularly the beggars from the front of the church who were great experts in financial analysis, looked quickly at Juana's old blue skirt, saw the tears in her shawl, appraised the green ribbon on her braids, read the age of Kino's blanket and the thousand washings of his clothes, and set them down as poverty people and went along to see what kind of drama might develop... They were students of the expressions of young women as they went in to confession, and they saw them as they came out and read the nature of the sin. (Chapter I, P. 9)

このように，あらゆる小説や詩において，人間の内部の善と悪とのたえることのない争いをテーマにしたものが多い。この作品も例外ではなく，善悪の認識がどんな形で展開されるかを，主人公 Kino 及びその家族と白人の医者が，サソリに刺された Kino の愛児コヨティートを媒体として，非情な人間模様を織りなしている．

また一方では，世界一の真珠を発見した Kino（Kino を取り巻く同じ種属の人々を含む）と真珠買いたちとの間に，真珠の売買をめぐって展開される人間模様を，スタインベック特有の touch で描写している．そしてこの作品の題名が示すように，真珠はこれらすべての人々の Symbol となっているのである．

ところで，Kino はこの真珠を売ることにより，巨額の富を得られるだろうと予測する．それにより，サソリに刺された愛児コヨティートも医者の治療を受けられ，その治療代を払うこともでき，無学の親の代わりにコヨティートには学問をさずけられるだろうと，Kino も Juana も夢に胸をふくらますのである．ところが空想と現実とは裏腹のものであり，コヨティートの治療代を医者にせまられる結果となり，真珠を売って治療代を払う旨，Kino は医者と約束する．翌日，Kino は市（まち）へ真珠を売りに行き，予想していた額（五万ペソ）よりもはるかにひくい言い値（五百ペソ）をつけられ，憤慨して真珠買いの手から真珠をひったくり，都会へ売りに行く決心をする．しかし，Kino がしっかりとした意志の持ち主であることに真珠買いたちが気づくと，彼らは値段を千五百ペソまでつりあげるが，Kino の意志はゆらぐことはなく，Kino の予測とは，はるかにかけはなれた安値に義憤を感じて，決して真珠を手放そうとはしないのである．

ところが，Kino の隣人たちは Kino が真珠を売らなかったことを知り，次のようなうわさをするのである．

> Kino's neighbours whispered together. They had been afraid of something like this. The pearl was large, but it had a strange colour. They had been suspicious of it from the first. And after all, a thousand pesos was not to be thrown away. It was comparative wealth to a man who was not wealthy. And suppose Kino took a thousand pesos. Only yesterday he had nothing.
>
> (Chapter IV, P. 53)

その後，Kino の真珠は，えたいの知れぬ何物かによって狙われる運命になる．すなわち，

> Then from the corner of the house came a sound so soft that it might have been simply a thought, a little furtive movement, a touch of a foot on earth, the almost inaudible purr of controlled breathing. Kino held his breath to listen, and he knew that whatever dark thing was in his house was holding its breath too, to listen. For a time no sound at all came from the corner of the brush house. Then Kino might have thought he had imagined the sound. But

Juana's had came creeping over to him in warning, and then the sound came again! the whisper of a foot on dry earth and the scratch of fingers in the soil. (Chapter IV, P. 40)

このようにして，えたいの知れぬ黒い物が真珠を奪いにやってきて，Kino と格闘を演じ，Kino は短剣でその黒い物かげをひと突きに刺し，かろうじて真珠を護るのである．このような醜悪な行為を行なう者に対して，Kino は何とも言いがたい憎悪を，身を持って感じるのである．一方，Juana はこの真珠に対して，不吉と罪悪感をいだき，真珠を手放そうと考えるのである．

Now the tension which had been growing in Juana boiled up to the surface and her lips were thin. "This thing is evil," she cried harshly. "This pearl is like a sin! It will destroy us," and her voice rose shrilly. (Chapter III, P. 41)

ところで，Kino は Juana とは逆に，一生のうちで，二度とないチャンスを与えてくれ，自分たちに対するあらゆる理想を現実にしてくれる可能性を秘めた世界一の真珠を手放す気にはなれない．なぜならば，それは病に対する湿布の役目や侮辱に対する扉の役目を果たしてくれると，Kino が常に考えていたかけがえのない真珠であったからである．その真珠は，Kino 夫妻が理想として心に描いていたあらゆる事柄を具象化した映像として，真珠の白い輝きの中に描き出して見せてくれたのである．

In the pearl he saw how they were dressed—Juana in a shawl stiff with newness and a new skirt, and from under the long skirt Kino could see that she wore shoes. It was in the pearl—the picture glowing there.....But Coyotito—he was the one—he wore a blue sailor suit from the United States and a little yachting cap such as Kino had seen once when a pleasure-boat put into the estuary. All of these things Kino saw in the lucent pearl, and he said: "We will have new clothes." (Chapter III, P. 25～26)

In the pearl he saw Coyotito sitting at a little desk in a school, just as Kino had once seen it through an open door. And Coyotito was dressed in a jacket, and he had on a white collar and a broad silken tie. Moreover, Coyotito was writing on a big piece of paper.

(Ibid., P. 27)

上記引用から明らかなように，Kino 夫妻が愛児コヨティートに抱いている夢や理想を，現実の姿として真珠に託し，その映像の中に具象化して映し出された不可能なことを可能にしようとして，真珠を握りしめる Kino の姿を，次の引用文中にはっきりとみることができる．

But Kino's face shone with prophecy. "My son will read and open the books, and my son will write and will know writing. And my son will make numbers, and these things will make us free because he will know—he will know and through him we will know." And in the pearl Kino saw himself and Juana squatting by the little fire in the brush hut white Coyotito read from a great book. "This is what the pearl will do," said Kino. (Ibid., P. 27)

このように，Kino によって理想化された真珠も，理想とは裏腹なものとなり，現実は，Kino の力ではどうすることもできない，もうこれ以上考えも力も及ばない無慈悲な真珠と化して，Kino 家に幸せを持たらすことはなく，Kino の手から離れてうつくしい緑の海原（うなばら）へと投げ返され，古巣へときらめきながら飛んでゆく．この真珠の姿は，まさに Kino 家の崩壊の象徴であり，この物語の Symbol となっている．

（3）

文章は parable にふさわしく，舞台を辺気楼のたちこめるメキシコの漁村に設定し，スラングを避け，簡潔を旨とし，頭韻(alliteration)，擬人法(personification)，直喩(simile)，隠喩(metaphor)，結句反復(epiphora)など，様々な文章構成法を用いて全体の雰囲気を盛り上げているのも，The Pearl における文体上の特徴である．文体上の観点から，作者が，この作品中に使用した副詞の種類について，頻度数の多いものを調べてみると次のようである．

種類	quickly	slowly	softly	quietly	silently	carefully
頻度数	26	14	14	10	8	9

何故に作者がこれらの副詞を用いたのか，まず第一に考えられること

は，動作の副詞である quickly と slowly が頻繁に用いられている点である．これはやはり，(1)で述べた動機や生物の登場と深い関係があるものと思われる．すなわち，一方では動物や生物を登場させることによって，作品に動きや活気を与え，また一方においては，これらの副詞を用いることによって，作品に動きのあることを，読者に印象づけようとしたものと思われる．

第二に考えられることは，一方では動きや活気に富んだ作品も，その迫力だけに終ることなく，劇的な場面では，やはり，softly や，quietly や silently という静的な副詞を用いることによって，作品に寂しさやむなしさを与えたものと思われる．そして，これらの副詞を用いることによって，作品をよりいっそう効果的なものにしているようである．

(4)

この作品における善悪という観点から，拙論をまとめてみると，作者スタインベックが小説の冒頭で『世界一の真珠がどうして発見され，どうして失われていったか……また人々の胸底に繰り返し語られたあらゆる物語の例にもれず，そこにはただ善きものと，悪しきものとがあるだけで，中途半端なものはどこにもない。』と，述べているように，作品全体が，このような考えによって貫き通されていることが理解できる．そして，世界一の真珠を媒体として，Kino やその種属によって代表されるものは，善なる範疇としてとらえ，白人の医者や真珠買いたちによって代表されるものは，悪の範疇としてとらえられている．

本質的には，善であるはずの Kino が，自分の身を護るための必要悪から，誤って殺人を犯してしまう罪をせおった悲劇の人間として，描かれている．すなわち，作者スタインベックは，ひたすら素朴な人達，貧しくて社会の下積みになっている人達の喜びや悲しみ，善意や不幸などに愛情深い眼を向け，そこに真の人間性を見いだそうとしたのである．前半では，人間社会の悪という印象が強いのであるが，しだいに個人的な色彩の強い善悪の問題へと発展しているのである．

すべて人間は，個人であれ，集団であれ，もし理解されなければ，結局は，悪となるか，あるいは悪に征服されるかのどちらかに走りやすいということを，作者スタインベックはこの作品を通して語りかけている．

参 考 文 献

1) Text: John Steinbeck. The Pearl: Heineman, London, 1967
2) Charlotte Alexander. John Steinbeck's The Grapesof Wrath: Monarch Press, Inc., 1965
3) J.C. Pratt. John Steinbeck: Wm. B. Erdmans Publishing Co., 1969
4) John Steinbeck. The Grapes of Wrath: Penguin Books In Association With William Heineman Ltd., 1964
5) 石　一郎『スタインベック』(研究社, 1967)

隠れキリシタンの「天地始之事」

紙谷威広

I

隠れキリシタンの伝承の多くは、最近の隠れキリシタンの衰退に伴ない、忘れられて行く傾向にある。また、明治初期のカトリックの布教による、教会に復帰するグループと、隠れキリシタンの信仰を守るグループの分離も、伝承の衰退を招いた一因であると言えよう。その中でも、「天地始之事」は早くから忘れられたように思われる。しかし、「天地始之事」は、幕末から文章化され、記録されて伝えられてきたために、詳細な内容に接することが可能となっている。田北耕也氏が入手した「天地始之事」は、文政十年が最も古いものであり、新しいものでは、大正十五年に記録されたものもある。これらの記録は、いずれも、長崎県の西彼杵半島、外海地方と称される地方か、五島列島で発見されたものである。

隠れキリシタンは、二つの系統に所属するものとされている。すなわち、平戸、生月地方を中心とした集団、系統

と、外海、五島列島の系統とである。五島列島の隠れキリシタンは、大村藩からの移住者とされているのであり、日繰りと称する、教会暦を中心に、行事を行ない、「帳」と称する組織によって、信仰を守ってきたのである。天地始之事と称する伝承は、後者の系統の中に見られるのである。

天地始之事は、その名称の通り、旧約聖書の天地創造の神話によって作成されたものと見ることができよう。ちなみに、天地始之事という書名は、第一節の名称から来たものとされている。したがって、天地始之事という書名は、この文章の全体の構成を示すものではない。では、天地始之事は如何なる構成をとっているのであろうか。次にその構成を示してみよう。標題は各節毎に掲げられてはいるが、必らずしも、その内容を示してはいないので、ここで、便宜的に、各節毎の内容を、旧約、新約聖書の内容に従って名称をつけてみた。

十五節中、一～二節が、旧約聖書から材料をとった部分である。すなわち、天地始之事とされる、第一節は、天地創造から始まり、人間が原罪により楽園を追放される部分が述べられている。第二節は、洪水伝説に当る部分である。第三節以降は、新約聖書に相当するのであるが、第三～十二節が聖ヨハネ（洗者）の誕生から始まり、キリストの誕生、公現、受難、十字架上でのキリストの死、キリストの復活といったテーマが語られる、さらに、聖母マリアの被昇天までが加えられているのである。それに続く、第十三～四節は、黙示録に当る部分と考えてよい。第十五節は、死者の蘇生譚であって、全体の構成から浮き上がった様に見える異質の部分であって、一部の写本には存在しないところから、後に追加されたものとされている。

「天地始之事」の構成

標題	旧、新約聖書からの翻案	付加された伝説、由来
天地始之事	天地創造、楽園追放	獅子駒の伝説、田歌の由来
まさんの悪の実中天に遣ること	ノアの箱舟（洪水）	鉄漿付けの由来、雪のサンタマリヤの伝説
天帝人間を為助、御身を分けさせ給事	洗者聖ヨハネの誕生	
羅尊国帝王死去之事	受胎告知	あべ丸やの由来
さんた丸や御艱難の事	キリストの誕生、三王の礼拝、キリストの洗礼	瘡の治癒、麦作りの伝説
朝五ケ条の御らっ所の事	宗論、洗礼、弟子	
べれんの国のよう鉄、国中吟味する事	幼児虐殺、ユダの裏切	金塚の由来
よろう鉄より御身を取に来る事	キリストの逮捕、拷問	
御主かるわ竜ケ嶽に連行奉事	十字架の道行	
盲目金に目のくるる由来の事	盗人の処刑、キリストの死	盲目と後世のたすかり
きりんとの事	キリストの復活	
御身後世助、始てなさしめたもふ事	聖母マリアの昇天	
役々を極させ給ふ事	死後の生命	木乃伊の薬飲まざる由縁
此世界過乱の事	世界の滅亡	死者の蘇生
〔追加〕	地獄の火による昇天	

標題は岩波「日本思想大系」による.

以上が全体の構成であって、田北耕也氏によれば、ロザリヨの玄義、十五ケ条の筋を追った形になっているとしている。すなわち、キリストの誕生から苦難、死、復活の順序が、十五玄義によると見ているのである。しかし、ロザリヨの玄義よりは、はるかに複雑な内容を含んでいるのであるから、その他の原典があったと見てもよいであろう。

但し、キリストの事跡については、用語の混乱等は見られないのであるが、第一節、第二節では、キリシタン用語に、多くの混乱、転訛が見られるのである。殊に、第一節の次の文章は、用語の混乱を指摘されている点である。

「それより十二天をつくらせたもふ。其名ベンボウ、此所地獄也。まんぼう、おりべてん、しだい、ごだい、ばっば、おろは、こんすたんち、ほら、ころてる、十まんのばらいそ、此所則ごくらくせかい也。」

とある。この中で、正確に使われた用語は、ばらいそだけである。さらに、このばらいそでさえ、ごくらくせかいとされ、「十まんの」という形容があるところから、明らかに、仏教の浄土が前提となっていることが理解できよう。田北耕也氏によれば、「しだい、ごだい、パッパ」は、黒崎地方で治病に使われた、「アネステーの功力の次第」という唱え言に起源があるとする。標題に続く文が、「五代目のパッパ、パウロ」となっていて、「しだい、ごだい、パッパ、オロヘ」と訛っていったとするのである。

正確に使用された語句は、頻繁に使用されるか、あるいは、「どちりいなーきりしたん」などで明確に定義づけられたものが多い。例えば、でうすなどである。しかし、デウス（神）も、天帝と記する場合があるので、どこまで、正確に使用されたのか疑問が残されるのである。その他、悪魔となった堕天使じゅすへる、あんじょ(天使)、あだん(アダム)、ゑわ(エバ)、さんた丸や(聖母マリア)などが、誤まりなく使用されている。したがって、当時使用する頻度の多かったものが理解できるように思われる。

一方では、仏教的な用語が使用されている点も注目されるのである。例えば、第六節の「朝五ケ条の御らっ所の事」では、学匠（がく十らんと原文にある）とキリストとの論争が描かれるが、キリストの説く所は、仏教の説と異ならないのである。

「御身（＝キリスト）のたまいけるは、天の高さ地のふかさ、八万余ぢょう、仏（ほとけ）とおがむは、天の御主、天帝、人間の後世のたすかりを、なさしめたもふ仏これ也（後略）」

とあって、八万余ぢょうという表現といい、仏とおがむはとあって、明らかに、仏教的な素養を積んだ者の手になっていることがわかる。

さらに、この天地始之事の文章は、由来を語る口調が、随所に見られるのである。「まさんの悪の実中天に遣る事」（第二節）には、次の文章がある。

「これより次第に、いやます人間なれば、食物もならざるゆへ、天にむかいて、祈誓を掛、「食物、あたゑたまわれかし」と、ねがいければ、天帝、虚空に出現ましまして、籾たねをぞあたゑたもふ。其たね、雪の中につくる。明六月よくみのり、八株に八石、其うら九石ぞみのりたり。八穂で八石の田歌の始これ也（後略）」

とあり、田歌の始これ也とあるので、田歌の由来を語ったと考えられる。

また、「天帝人間を為助、御身を分けさせ給事」には、次の由来が語られる。

「一、刳船にのり命をつぎし七人のものどもは、其島を住所と定むといへども、夫婦の極めなくゆへ、女は眉をおろし歯に鉄漿付る事、比時よりはじめ也。」

とある。刳船とは、津浪による世界の滅亡から、逃げるために乗り込んだものであり、箱舟の翻案と考えられる。ここで、夫婦の極めがないからと、眉をおろし、歯に鉄漿を付ることを始めたというのである。習俗の起源をこのようにして説明しようとしているのである。

地名の由来を語る部分もある。「べれんの国よろう鉄、国中吟味する事」（第七節）には、金塚と称する地名の由来

が語られている。

「ほかの弟子ども寄りあつまり、「さては十だつ、おのれは師匠の事を訴人したるか、不届者、それゆへに其ざま」と、口々にいましむれば、十だつは面目なし。御寺脇に、金をすて、そこなる森のしげみ、はしり入り、首くゝりてぞ自滅せり。三たーゑきれんじゃの寺の脇なる金塚といふ残せしは、此ゆへなり。」

十だつとはキリストを裏切って、金を受けとった、ユダである。本来の話の筋は、血の畑が残ったというのであるが、これが金塚に変化したのは、金塚などの地名があったためではないだろうか。塚の地名伝説が各地にあるから、類推によるものと見ることもできそうである。

「此世界過乱の事」と称する、第十四節は、世界の滅亡を説いている部分である。この中に、木乃伊の薬を飲まない由縁が語られている。

「評に白、此時に、行きまようあにまあるといふ事。何故かと尋に、此界にて、最期の時、火葬にあふたるものの、あにまなり。末世までまようて、浮ぶ事これなしといふ事也。たとへ土葬又は水葬にて、死骸を畜類、鳥類、魚類にくわるゝといへども、焼け滅したる時は、それ〳〵に、元のごとくにまいるべし、といふ事。人間に服せられし色身は、又々、きたらざる也。此ゆへをもって、木乃伊の薬飲まざる也。」

かなり混乱した文章の様に思われるが、世界の滅亡の時は、土葬、水葬の結果、畜類に食べられたとしても、元の姿に戻ると信じられていた。それに対して、人間に服せられた肉体は元に戻らないから、木乃伊を薬として、飲むことはしないというのであろう。木乃伊を薬としたことは管見にないが、このような薬の知識があったのであろうか。

以上、見てきたように、各所に由来、由縁が語られているのである。これらの付加された内容は必らずしも、「天

地始之事」の全体の構成に整合的なものとは言えないのである。また、断片的なものが多数、見られるわけである。

しかし、一方では、この天地始之事の構成に直接関連するような内容が付加された部分もある。「まさんの悪の実中天に遣る事」の部分には、獅子駒の伝説がある。人の悪事が多くなったために、洪水を起して、世界を滅ぼし、ノアの家族だけを残した、箱舟の伝説が、材料となっているのである。

「(前略)次第に悪事つのるゆへ、でうすこれをあわれみたまいて、ぱっぱー丸じといふ帝王に御告そ有けり。「此の獅子駒の目、あかいろになる時は津浪にて、世は滅亡」との御告にかふむり、帝王は日ごと寺ゑまいる。……(中略)……

「わきの子どもきいて、わらいていふやうは、「さても、おかしき事、ぬりたら、すぐに赤くなるが、滅亡はおもいもよらぬ」とぬりけり。」

このように、目を塗ってしまったところ、大波が来たのである。用意した刳舟に、子ども6人をのせ、足の弱い兄一人が乗り遅れてしまった。この兄は、獅子駒に助けられて、その背中に乗って、「ありおふ島」にたどり着いたのである。これは、五島の各地で採集される、高麗島の伝説と結びついているとされている。

「天帝人間を為助、御身を分けさせ給事」には、雪のサンターマリヤと呼ばれる伝説がある。サンターマリヤが、神の声を聞いて、びるぜん(不婚)の行をする誓いをたてたが、ろそんの国の帝王は、サンターマリヤを妃に願った。マリヤの祈りに応えて、神は食事を出して、帝王に見せ、あるいは、六月のさ中であるにもかかわらず、雪を降らせて、マリヤを逃れさせたのである。こういった、物語性を加味して、話の筋を展開させているのである。

このような展開は、聖母マリヤとイエスが王の追求を逃れた話にも加味されている。すなわち、「サンタ丸や御懇

難の事」(第五節)に、麦作りと聖母マリアの伝説がある。

「ゆきすぎれば、麦作りの大勢にゆきあい、「そこもと方々、御たのみ申事、一すぢあり。われは後より追手のかかるもの也。たづねきたり候わば、「此麦まく時分に、とうり候也」と申くれよ」とたのみければ、麦作りどもいふようは、「たざいまつくる麦に、此麦つくる時分とわ、さておかしき事かな」とぞ笑いける。後日此麦出来ざりけりといふ事。」

とあって、麦が出来なくなった伝説が加えられている。さらに、これに続けて、別な麦作りに同じことを頼むと、よろこんでひきうけ、直ちに麦ができて、落ちたという話が付加されているのである。これは、弘法大師伝説にある、食わず芋等の伝説に類似しているのである。

これらの種々の伝説が、付加されていて、「天地始之事」を展開させているのである。「天地始之事」は、聖書の物語の翻訳としての性格があるが、同時に、日本的な伝説が付加されることで、より豊かな内容を持つに至ったように思われる。しかし、これらの伝説は、由来を種々の形式で語っているのであり、対象となっているものは、断片的なものが多いのであり、「天地始之事」がのべるテーマの中心は、洗礼、ばうちすもの起源ではないかと考えられる。

II

天地始之事では、洗礼の起源を、次のように記している。

「弐人の落人、あやうき所、よう〳〵のがれさせたまへて、ばうちすもふの大川にて、つかせたもふ。さんーじわんに御ゆきあい、「其方は、いづくにまいるべきや」と、のたまへば、さんーじわん、「われは、御主に御水をさ

づけ奉らんため、七ケ月さきに、うまれたり」とありければ、御主悦、「しかれば此川中にて、水をさづけ、くれよかし」とぞねかわせける。其時より、御主じゅすーきり人とぞうやまいける。さてもきれいの名水かな。

悪人の後世のたすけのため、此水割れよかしと、思召まゝに、四万余すじにわかれ、其川裾の水授かりしもの、みなばらいその快楽を受け奉るという事、うたがいなし。」（「さんた丸や御懇難の事」）

と述べている。ここに弐人とあるのは、さんた丸や（すなわち聖母マリヤ）とキリストであり、洗礼を授けるのは、洗者聖ヨハネ（文中さんーじわん）となっている。さらに、この川の水が、悪人の後世のたすけのためになるように四万余すじに分れたとしているのである。洗礼の起源をこのように述べ、さらに、次節「朝五ケ条の御らっ所の事」では、がくじうらん（学匠等が固有名詞化したものとされる）の門弟十弐人が洗礼を受ける場が描かれる。

「さるほどに、此事をきゝ、がく十ら、門弟十弐人、「我々がく十ら、師匠と称するも、かゝる因縁をしらんため。今日からは、御身の弟子になしくだされかし」とねがいければ、御身心得、「ずいぶん、其方のぞみにまかすべし。」と、十弐人に水をさつけ、師弟の約束ぞなされける。しかるに、寺にまいり、群集の人々、我も〳〵と水さつかり、こんぞうるとつかさどる。」

さらに、多くの人々が洗礼を受けたとするのである。このばうすちも（洗礼）を受けなかった者は、後に、「天狗とともに、べんぼうといふ地獄にぞおち」て、「此所にをちたるものは、末代浮らずといふ事」とあって、後世のたすかりを得られず。「ばうちすもふさづかりし右のものは、でうすの御供して、みなはらいぞへまいりける。」とされ、さらに、

「はらいぞにて善の多少を御あらためありて、それそれの位ぞかふもりけり。此所にて、法体をうけ、末世末代自

由自在得て、安楽のくらしをするこそたのもしき」

と述べられているように、善の多少によって、各々の位が与えられて、永遠の安楽な暮しが得られるのだとする。仏教的用語が多少、使用されているし、善の多少によって、位が与えられ、法体をうけるなどの概念は、仏教的な救済観が隠されているように思われる。古野清人氏の指摘する、混成宗教としての性格が表現されている。

「どちりいなしきりしたん」の第十一には、ばうちすも（洗礼）について、次の様な規定がある。

弟　ばうちすもとは、何事ぞ。

師　ばうちすもとは、きりしたむになるさからめむと也。是をもてひいですと、がらさを受け奉り、おりじなる科と、其時まで犯したるほどの科を赦し玉ふさからめむと也。

洗礼とは、キリシタンになるための秘跡であり、洗礼によって信仰と恩寵を得ることができ、原罪と洗礼を受けるまでに犯した罪が許されるのであるという。また、この洗礼を受ける方法は、次の様に「どちりいなーきりしたん」に記されている。

弟　此さからめんとをば、何と様にぞ授け玉ふぞ

師　是を授かる人の頭か、せめて其人の身の上に水を掛くると共に、此文を唱ゆべし。

「いかに〇べとろ、ばうろなり共、名を付て、〇それがしでうすーばあてれ、ひいりょ、すぴりつーさんとの御名を以てなんぢを洗ひ奉る也。あめん」

と云べし。是を経文の唱へには、〇何れの名なり共、付て後、

十ゑご〇て〇ばうちいぞ〇いん　のうみね〇ばあちりす〇ゑつ〇ひいりい〇ゑつ〇すぴりっす〇さんち〇あめん

と云也。（『キリシタン書、排耶書』六四～五頁）

とあって、このばうちずもを授からずとも、望んでいれば、助かるとし、さらに、後生を扶（たすか）るために必要なことなので、男女に関わりなく、誰でも授けることができるとされていたのである。したがって、聖職者の指導を得られなくなった、隠れキリシタンにとっては、村落内の在俗指導者によって、洗礼が授けられ、キリシタンとなるために必須の儀礼とされたのである。

五島奈留島の道脇増太郎氏のオラッショ（祈禱文）によって、洗礼の方法を見てみよう。「どちりいなーきりしたん」に述べられた簡単な文章からは想像できない程、体系化された儀礼となっている。（「隠れキリシタンのオラショ」『民間宗教』九四五～七頁）

先ず、この洗礼の儀式は、ウマレトドケと呼ばれていて、三段階に分けられている。第一段階は、ウマレトドケマエのツトメカタ。第二段階はウマレトドケ、第三段階がウマレトドケのアトザのオンレイとなっている。第一段階は、洗礼を授ける役目の者が、サツケ（洗礼）を首尾よく勤められようにという祈りである。第二段階が、洗礼の主要な儀礼である。この第二段階も、さらに五段階に分けられる。

①オミキ、オメシ、ナマクサケ等のオンハツオ（御初穂）の届け（すなわち、種々の供え物の届け）。

②今生、後生の助を求める、ケレンド（クレド＝便徒信条）の祈り。

③洗礼（水を授ける）儀礼。

④洗礼の感謝の祈り。

⑤洗礼を無事授けたという役職者の感謝の祈り

となっている。さらに、第三段階は、洗礼が終って、感謝の意味をこめた、供え物の届けである。

洗礼の中心部分の祈禱を次に引用する。

「ベートルトイフハ、切支丹ニナリタイカコノ水ト申スルハ、天ジョクノ、ジュース川ヨリナガレクダラス、セッシャリンノ川ノパヲチーズノ水ヲ、サツケサセタマウ。

ヨコデパヲチンズルモーノイノメパヲチンズルモーノ、エッヒーリューエッスベリツサンワンノチーリー」

となっている。かなりの転訛と意味の明確でない部分が出て来る。川の名前は、天ジュク（天竺）のジュース川より流れ下る、セッシャリンの川となっていて、天竺という概念が付加されているのである。

しかし、この道脇氏のオラッショの特徴は、種々のトドケの部分であろう。第二段階の④の部分を見てみよう。

「サテサテカタシケナーコノ子ノ、コンジョーゴショー御助ケナサレ下サレマシテ、ベートルトイフ名ヲ下被マシテ、アナタ、オンミ上主サマノ子分三太丸ヤサマの子分三トメアーボストロサマノ御支配内ノ人間ニナシクダサレマシテ、シュビヨク十文字ノ御ハンモ、オシエ、ナサレ、下サレマシタルオンレイニハ、天ニマシマスサマイトナガレアナタオンミ上主サマヘゴオン禮トシテ申上ゲタテマツル、ゴカンタイナガラ御取次ニハオン母三太丸ヤサマヘツツシンデ頼ミタテマツル」

とあり、この後で、「テンニマシマス……」という主禱文が続くのである。上主サマとはデウス、三太丸ヤは聖母マリヤであり、これらの固有名詞は、正確に使用されている。洗礼の無事終了した感謝として、主禱文を、デウスに捧げるのである。さらに、第一段階、第三段階に見られる、種々の供え物の届けは、より明確な特徴がある。第三段階のウマレトドケノアトザノオンレイ（生れ届けの後座の御礼と書くことができよう）を引用してみたい。

「下界増太郎生キタル、右リ殿ノ帳内、下界ハツ丸ヤ女、両人ノ家内ウチ、男子、一人生レキマシテ、切支丹一人ツクリイダシマシテ、アナタ、オンミ、上主サマノ、子分、三太丸ヤサマノ子分、三トメアボーストロサマノゴシハイウチノ人間ニナシクダサレマシテ、シュビヨク、十文字ノゴハン（御判）モオシエナサレ下サレ、マシタル、オンレイトシテ、サシアゲマシタル、オミキノ、オンハツヲニ、ナマクサケノオンハツヲ、ツギソエ、マシテ、オントリツギハビヤートノサントスサマノオントリツギヲ、モチマシテ、三太丸ヤサマヘ差上ゲタテマツル、二番ニツギソエマシタル（後略）

洗礼によって、ベートルという名前をつけ、デウス、聖母マリア、三トメアボーストロの子分になり、十文字の御判を教えたことを報告し、神酒と生臭気の初穂を棒げたのである。この後、サンジュワンなどの聖人達にも初穂が供えられるのであるが、長くなるので省略したい。

以上の道脇氏のオラッショに見るように、洗礼の儀礼は、隠れキリシタンの間に於て、複雑で、重厚な儀礼として発展したと見ることができよう。この儀礼をさらに、具体的な調査報告の中から見直してみよう。天地始之事を伝承してきたのは、長崎県の西彼杵半島の外海地方と五島列島を中心とした地方であり、生月島、平戸島の隠れキリシタンは、前記地方の隠れキリシタンとは異質の系譜をひくものと考えられる。洗礼についても、若干の差があり、同一視することができない。したがって、ここでは外海地方、五島列島での洗礼について見ることにする。

この地方の役職者は、帳方、水方（看坊ともいう）、取次役の三者である。取次役は、見習いであって、主要なのは、前二者である。帳方は、日繰りと称する暦を保存し、役職者を通じて、年間の儀礼や祝日を人々に教える役目を持っている。この暦は、バステヤン暦と呼ばれる、教会暦であって、聖人の祝日及びキリストの降誕、悲しみ節、復

活といった祝日が記録されている。これらの祝日には帳方の家に集まって座と称する集会を開くこともあり、あるいは、ワルカ日（悪か日）と称して、肥料を使ったり、針仕事を避ける、物忌みの日となっているのである。水方は、水授け（洗礼）を行う役である。水方は、勿論、帳役にしても、かつては、一生一代汚れたことをしなかったとされている。役をやめても肥料などは扱わないことになっていたようである。役職者は全員、水授けには立ち合うことになっていた。お授けの前三日、後三日は、三役とも汚れたことはしてはならない。汚れたこととは、農作業、針仕事、肥料を扱うことなどである。したがって、これらの役職者は、大きな負担となったと見ることができる。洗礼にかかる前には、その家で風呂に入って、それ以後は小便もしないというのである。これらの清浄、汚れに対する観念は、日本の民間信仰に類似したものを見ることができる。

お授けは生まれてから、三日目に行なうことが多かったようである。名称は、ポーチスモ（ポルトガル語からの転訛）。お授け、水授けといった、儀礼から命名されたと考えられる名称。ミツメ祝い、ナズケ祝いといった日本の誕生、産育儀礼に由来する名称。といった、三種類に分けることができよう。またこの儀礼を「角欠ぎ」とも呼んでいる。これは、お授けをしないと角が生えたままだから（奈留島矢神）とされている。前三者の名称の中で特徴的なのは、ポーチスモと水授けが儀礼に由来し、キリシタン用語の定着と見ることができるのに対して、ミツメ祝い、ナズケ祝いが、民俗の中の産育儀礼に由来している点であろう。キリスト教の定着と民俗の側からの受容という二つの側面が如実に表現されたものと見ることができよう。宗教的側面と民間信仰の併存といってもよいであろう。

洗礼には、ダキ親が必要とされた。カトリックの代父母である。ダキ親は、実父や実母であってはならない。子どもは、ダキ親のアルマの名（霊名）をもらう。但し、日曜日に生まれた者は、男はドメゴス、女はドメガスというア

ルマの名を付けるので、その名前のダキ親を頼むのである。ダキ親は、親戚でも、親戚でなくともよいとされている。奈留島では、叔父か叔母に頼むことが多かった。ヒモトキの祝いには、帯や褌をダキ親が贈り、婚姻の際のツレニンとなったりする。また、子どもは、正月には、ダキ親の家にセッソ（節餅）と称する餅を持っていく。このように、ダキ親と子どもは一生交際を行なうのであり、さらに、アニマの親子は天国でともに暮すと信ぜられたのである（古野A二四九頁）。

さて、次に古野氏の報告によって、福江島の黒蔵のお授けを見てみよう（古野A二〇三頁）。

お授けは人間でない者を人間にしてもらうためにあり、抱き親のアルマの名をもらう。男の抱き親は役人に準じて身を潔斎し、女の抱き親は月経のときは看方に断わっておかなければならない。

お授けのときは、水を入れた茶碗一つと空茶碗一つを置いた膳と、ゴエモン（魚名）、刺身、小皿四つ、かん瓶、盃、醤油と新箸六人分をのせた膳と、別に酒と御飯が二杯分ずつが用意される。お水は川の流れに向かって汲みあげる。取次役は水を空茶碗に適度に移して、これでよいかと尋ねる。看方がよいと答えると、膳の上に置いて、ケレンドを唱える。そして親が子を抱く。看方は水に十字を切って、この水を子の頭に落とす。このとき「ヨコテパウチスモ、エッヒーリョウ、エッスベリッサンテ」と三つに分けて落とす。

お前は何と申しますかと問う看方に対して、取次役がその子のアルマの名を答える。この後で、看方と抱き親が、キリシタンになりたいかどうか、身に差支えはないか（禁忌を犯していないか）といった問答をする。これは、子どもの代理として抱き親が答える形になるのである。この後で「あなたさまの品物」と称する着物の切れで頭を三回ふりて、それを納めて、お授けが終り、三役と抱き親が定まった儀式で、共に酒を飲み御飯を食べる。

以上の様な順序である。奈留島の道脇増太郎氏のオラッショ程には明確ではないが、オミキのオハツヲとかナマグサのオハツヲとされていたものが明らかになった。しかし、道脇氏のオラッショに見られるような、ウマレトドケなどのトドケの部分が明確には現れていないのである。

以上見てきた、水授け（ボーチスモ）の中で、重要な点が数多くあった。その一つとして、ダキ親と子どもの関係があげられる。古野清人氏は、これを儀礼的親族関係と呼び、メキシコやスペインなどの事例と比較した。しかし、ダキ親と子の関係は、

①親戚であるかどうかを問わない。あるいは親戚、血の遠くなった親戚に頼んだりする事例がある。

②ヒモトキの贈答があり、婚姻の仲人をつとめる。また、正月のセッソを子どもがダキ親に贈る。

といった点から見れば、日本の擬制的な親子関係、仮親に基盤を有することがわかるであろう。しかし、ダキ親と子の関係が死後まで続いているという認識は、別の次元の問題を提供している。すなわち、水授けの際のダキ親は、人間の根本的な救済に関わる存在であり、それは、アルマの名（霊名）を与える者と認識されている点であろう。

そのことはまた、福江島の黒蔵における、水授けに対する認識にも表現されている。すなわち、「お授けは人間でないものを人間にしてもらう」のである。奈留島の矢神では、「お授けをしないと角が生えたままであるから、お授けを「角欠ぎ」と称する」のである。同島の宿輪では、「生まれたまま水をかけねば角が生えてくる」とされ、角かぎをするのである。これらの救済観を「天地始之事」の中に探ってみよう。

III

「天地始之事」は先に述べたように、天地創造、天使と人間の堕落、キリストの生涯、聖母マリアの事跡、世界の終末などのテーマが、種々の日本的な伝説を交じえながら述べられているのである。「天地始之事」の最初の文章は、

「一、そもそもでうすと敬い奉るは、天地の御主、人間万物の御親にてまします也。

という言葉で始まり、十二天を作り、日月ほしを作り、数万のあんじょ（＝天使）を自由に召しよせたとしている。この部分では、種々の転化もあり、本来の用語の意義から離れてしまった部分もある。

さて、また、でうすは人間を作り出すのである。

これ則人間の五体也。天帝より四ふんの息を御入ありて、どめいごすのあだんと名づけ、三十三の相也。

つまり、三十三番目の存在として、人間の始祖あだん（アダム）を作ったというのである。この日がどめいごす、つまり日曜日であって、大切な祝いの日とされた。五島や外海地方の隠れキリシタンが、日曜日に生まれた子どものアルマの名をドメゴス（男）、ドメガス（女）と名づけるのは、この伝承と関連しているものと考えられる。

また、これに続いて、女を一人作って、どめいごすのゑわと名づけて、夫婦とし、男子女子二人を生んだとする。（この伝承は、聖書本来の伝承とは異なる）。ゑわ、あだんの二人は、でうすを礼拝するために、ばらいそに通うのであるが、この時、デウスにそむいて悪魔となった、じゅすへるの誘惑にあう。その結果、神によって禁止された、ません（りんごの意）の木の実を食べてしまうのである。そのために、二人は天の快楽、天国への道をとざされてしまうのである。あだんは四百余年間の後悔をした後に救われるとされたが、ゑわは、中天の犬となれと蹴さげられ

て、ゆくえも分らなくなってしまうのである。ゑわの子どもは、畜生を食し、月星を拝み、後悔してまいるべしとあって、罪の結果として、子どもは肉食をし、月や星を拝むというのである。肉食を罪の結果とした点は、仏教の影響を受け、農耕に基盤を置いた生活からくる、日本的な罪の意識であろう。

ところで、ここに登場するじゅすへるの姿は、「鼻たかく、口ひろく、手足は鱗、角を振りたて」とある。この姿は、南蛮人、宣教師達を卑しめるために使用された言葉であるが、それが、そのまま伝承の中に加えられているのである。それと同時に、手足は鱗、角を振りたてという点から、悪魔を描いた姿が、当時知られていたことを示してもいよう。罪を有する者の姿として、このような角や鱗といったものが示されたのであろう。

また「まさんの悪の実中天に遣ること」と称する節の文章は、次のような話の筋となっている。すなわち、人間は夫婦の契りを知って、人間の数が増え、食物が足りなくなった。天に向って祈った結果、籾種が与えられる。雪の中に作って、明六月にみのって、食糧が増えた。すると、この結果、悪心、欲心の世の中になり、うん欲、貧欲、我欲という三人の者が生じて、善人の食物をほしいままにうばい取るようになった。デウスはこれを憎み、三面に角が生えていた、三悪人を海の底に蹴込んでしまった。

以上が、この節の前半部分である。ここで言われる、三悪人の姿の中にも、角が生えていたとあり、角は悪と罪との象徴と考えられていたわけである。洗礼を「角欠ぎ」と称するのは、これらの悪魔や悪人の姿にあらわれる、「角」をとり去るものと信じたからであろう。お授け、水授けといった名称とともに、角欠ぎという名称は、外海地方及び五島で使用されているのである。「天地始之事」の分布と共通しているのは、理由なしとし得ないのである。

さて、第一節の最後の部分には、このように記されている。

「以前に、かくれいたるじゅすへるは、鼻ながく、口ひろく、手足は鱗、角をふりたて、すさまじく有様にて、天帝の御前にかしこまり、「わが悪心ゆへに此ざまに相成、行先とてもおそろしく、何とぞばらいその快楽を、うけさせたまへ」とねがいける。天帝仰けるは、「悪性なる汝、天には、かつてかなわぬ、下界はゑわの子ども後悔ゆけば、これ又かなわぬ。よって、雷の神となれ」と、十相の位をゑ、中天をぞゆるされける。

さてじゅすへる拝みし安所方、かなしいかなや、みなことゞゝく天狗となり、中天にぞ下りけり。」

とある。悪魔、罪ある天使（安所方）、ゑわなどが、中天に蹴おとされるという伝承は、興味を惹かれる。すなわち、死者の霊が中空をさまようという観念があり、この伝承に反映したと考えることができる。さらに、じゅすへるに従った、あんじょが天狗となり、中天に下るという伝承は、日本の民間信仰の中にある。悪霊や御霊信仰を背景に定着したものであろう。じゅすへるが御霊の出現形態の一つの特徴となっている、雷神になっている点も同じことが言えるであろう。

天狗は、キリシタンにおいては、悪魔と同様の意味を有した。「どちりいなしきりしたん第二」には、次の文章がある。

「（前略）人もるたる科を犯せば、天狗即其者を進退するが故に、奴と成ける者也」

つまり、死すべき罪を犯した者は、天狗に操られる奴となるというのである。天狗となったあんじょとは人間を罪にひきいれる存在となるのである。鼻高く、口ひろき者の姿は、天狗であったとも言えよう。

隠れキリシタンにとって、下界は、人間が畜生を食し、苦難を受けるところである。これに対して、パライソは天上の世界であり快楽に満ちた世界である。この中間に、天狗、悪魔の存在する中天があった。中天と下界は罪の世界

なのであり、ここから、パライソに行くには、授けが必要とされたのである。水授けの無い時代には（キリストの救済以前）、死者はべんぼうに行くものとされた。しかし、キリストの出現以後は、水授けを受けた者が、パライソに行くことが出きたのである。角欠ぎという名称から考えれば、本来人間が有する角をとって、地獄を免れるために受けるのが、水授けである。この角はジュスヘルや、三悪人の角であろう。「天地始之事」は、洗礼、水授けの由来を説くことが、中心に置かれている。それは、死後、角を有する者として、中天に迷うことを防ぐ方法であった。死者の霊が、中天にさまようという概念は、日本の民間信仰の中にあった、霊魂観に基盤を有しているのではないだろうか。死者の霊魂が、中空をただよい、悪神として、人間に害をなす者という観念が、「天地始之事」という文章の中に、存在するのではないだろうか。したがって、日本の在来の思想の上に、キリシタンの用語が冠せられて、伝承されてきたものと言っても、過言ではないだろう。

参考文献

「天地始之事」は、次の二書に収録されているものを引用した。

『キリシタン書・排耶書』（日本思想大系25、岩波書店）田北耕世校註
三八二頁～四〇九頁（本文）、五〇六頁～五一二頁（補注）、六三二頁～六三四頁（解題）
『民間宗教』（日本庶民生活史料集成第十八巻、三一書房）一〇〇一頁～一〇一九頁
「隠れキリシタンのオラショ」前掲『民間宗教』九一五頁～九七六頁
「どちりいなきりしたん」前掲『キリシタン書、排耶書』一三頁～八一頁

引用、参照文献

A『隠れキリシタン』古野清人（至文堂、昭三四年一一月）
B『かくれキリシタン』片岡弥吉（日本放送出版協会、昭和四二年六月）
C『昭和時代の潜伏キリシタン』田北耕也（学術振興会）

編集後記

今回，従来の「論叢」を「紀要」と改め，第6巻を刊行することとなった。これを期に心機一転して，本学の研究業績をさらに向上させたいと考えている。本紀要の論文は，英語教育・英語学・英文学・民俗学と内容は多岐にわたっているが，それぞれ不断の研究会活動等の上に立った労作である。各位の御鞭撻を願う次第である。

編集委員

委員長	教授	近藤久美子
副委員長	教授	中尾　堯
委員	講師	紙谷威広
委員	講師	佐藤秀一

東京立正女子短期大学紀要第6巻

昭和53年2月20日　印刷
昭和53年3月1日　発行

編集　東京立正女子短期大学紀要編集委員会
印刷所　株式会社　第一印刷所
〒104　東京都中央区湊2－2－4
TEL　03（551）3061（代）
発行所　東京立正女子短期大学
〒166　東京都区杉並区堀之内2—41—15
TEL　03（313）5101～3

THE JOURNAL OF TOKYO RISSHO Jr. COLLEGE FOR WOMEN

No. 6 **March, 1978**

CONTENTS

Usages of Punctuation Points in Teaching English.....M. Iguchi...(1)
On the Visual-Aid in Teaching English at Secondary Schools
.....F. Tajima...(16)
Nouns Converted from Verb-Particle Combination.....T. Kageyama...(29)
On the Style and the Problems of Good and Evil
in *The Pearl* by John Steinbeck .....T. Fukazawa(46)
That Evening Sun by WilliamFaulkner
—"I just a nigger. It ain't no fault of mine"— .....S. Sato...(56)
The Bible for *Kakure-Kirishitan*, Secret Christians in Japan
.....T. Kamiya...(86)

Published by
Tokyo Rissho Jr. College For Women

TOKYO JAPAN